

西九州大学

令和7年度 自己点検評価報告書

令和8年5月

西九州大学 点検・評価運営委員会

目 次

1. F D委員会	2
2. 大学院F D委員会	3
3. 大学院研究科	4
4. 健康栄養学科	5
5. 社会福祉学科	7
6. スポーツ健康福祉学科	10
7. リハビリテーション学科	13
8. 子ども学科	15
9. 心理カウンセリング学科	17
10. 看護学科	21
11. デジタル社会共創学環	27
12. 教務委員会	28
13. 共通教育運営委員会	29
14. 教職課程委員会	30
15. 学生支援委員会	31
16. 入試広報委員会	33
17. 図書館	34
18. リカレント教育・研究推進本部	35
19. 国際交流センター	36
20. D X推進センター	39
21. ダイバーシティセンター	40
22. S D委員会	42
23. 事務局	43
24. 総合評価	45

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、() 内は責任者 ◎印は優先事項 達成度は x/10

区分及び 担当	令和7年度検討 および実施事項	令和7年度総括	達成度
FD委員会 (委員長)	◎教育の質転換に関するFDの実施 【到達目標】 ・教学IR活動・アクティブ・ラーニング等に関するFDを実施して全教職員による実効性ある活動として根付かせる。 ・学修到達度の可視化のためのFDを行う。	・6/5 (木)「近年における志願者の動向について」と題して学生募集に関するFDを実施した。 ・3ポリシー、ルーブリック、ディプロマ・サブリメントを改訂した。	7
	◎教育の質保証に関するFDの実施 ・教学マネジメントに関するFDを実施し、教学マネジメント体制の整備・充実を図る。 ・卒業生からの意見を集約するため、学生支援課と連携しての卒業調査実施に向けて調査を開始する。[明吉1.1]	・7/3 (木)「科学研究費助成事業について」と題して科研費の適正な管理と不正防止についてFDを実施した。 ・卒業生との話し合いの席上で学生の要望等を聞いた。	10
	◎学生による授業評価 【到達目標】 ・授業評価に関する学生の実施率80%を達成する。	・講義時間内での調査回答の増加により実施率80%を達成した。	10
	○学生の学修実態調査を実施し、回答率の向上を図る。	・学修実態調査(教務課実施)と学生生活実態調査(学生支援課実施)をIRコンソーシアム調査に切り換えて実施した。(IRコンソーシアム調査回答率76.1%)	10
	【到達目標】 ・大学教育の流れ及び教員の要望に応じてFDを開催する。	・年度末に教育の改革に関するFDを行った。	10
	◎他大学とのFDの実施 【到達目標】 ・他大学と合同のFDを実施し、課題・解決策の共有化を図る。	・予定していた他大学と合同のFDはSDとして実施された。	7
		当該委員会 達成度集計	54/60
		達成度平均点	90/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び 担当	令和7年度検討 および実施事項	令和7年度総括	達成度
大学院 FD委員会 (研究科長)	<p>【3-3 学修成果の点検・評価】</p> <p>◎大学院主催FD研修会の計画・実施する（継続）。</p>	<p>【3-3 学修成果の点検・評価】</p> <p>◎大学院主催FD研修会で「グローバル人材教育」のテーマで記念講演・シンポジウムを実施した（遠隔で学部・院教職員、学生に呼びかけた）。過去最高の115名が参加した（大学院生を含む）</p>	10
	<p>◎院生による授業評価の継続実施と授業へのフィードバックシステムを検討する（継続）。</p>	<p>◎院生による授業評価の継続実施と授業へのフィードバックシステムを検討した（今年度は前期、後期に分けて授業へのフィードバックを実施）。</p>	6
		当該委員会 達成度集計	16/20
		達成度平均点	80/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、() 内は責任者 ◎印は優先事項 達成度は x/10

区分及び 担当	令和7年度検討 および実施事項	令和7年度総括	達成度
大学院研究科 (研究科長)	<p>基準1. 使命・目的等 ≪各学科・研究科の強み、特色の明確化≫ 【1-2 学部学科・研究科のブランドの明確化および変化への対応】 ◎QSP (九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォーム) 健康・医療・福祉分野:生活習慣病予防事業への調査・研究を推進する。(継続)</p> <p>【1-4 研究活動への反映】 ◎教員・院生の研究活動の活性化を図る。科学研究費等外部資金への応募数、採択数の増加を目指す(継続)。 ○生活支援科学研究科(修士7、博士4専攻)の国内外学会発表、投稿論文を推進する。</p> <p>基準2. 学生 ≪学生の受入れ、学生の支援、学修環境、学生の意見等への対応≫ 【2-1 学生の受け入れ】 ・到達目標は定員の確保。(継続)。</p> <p>基準3. 教育課程 ≪卒業認定、教育課程、学修成果≫ 【3-2 教育課程及び教授方法】 ◎各専攻修士課程・博士後期課程への指導体制の充実を図る。(継続)。</p> <p>基準4. 教員・職員 ≪教学マネジメント、教員・職員配置、研修、研究支援≫ 【4-2 教員の配置・職能開発等】 ○大学院各専攻の教育研究に即した人事計画を策定する(継続)。</p> <p>特記事項 ○大学院広報の充実。入学者増に向けた広報活動を推進する(継続)</p>	<p>【1-2 学部学科・研究科のブランドの明確化および変化への対応】 ◎QSP (九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォーム) 健康・医療・福祉分野:生活習慣病予防事業への調査・イベント (R7年11/30健康ウォーキングに市民331人が参加した(アンケートの結果次回も参加したい人98%)。</p> <p>【1-4 研究活動への反映】 ◎科学研究費等外部資金への継続課題数17件、新規応募数60件(63.6%)、院生研究活動として学会発表19件、投稿論文14件であった。</p> <p>【2-1 学生の受け入れ】 ◎修士課程定員25名中15名、博士後期課程定員9名中5名が入学した。 大学院収容人数73名中56名が在籍している(内、留学生8名)。</p> <p>【3-2 教育課程】 ◎栄養学専攻博士後期課程への指導体制の充実を図った(特別研究に6名体制)。</p> <p>【4-2 教員の配置・職能開発等】 ○健康福祉学専攻博士後期課程では教育研究に即した人事計画の策定した(特別研究に6名体制)。</p> <p>特記事項 ○ホームページに大学院の活動(修士論文報告会、博士課程の教員紹介などを掲載した。</p> <p>・スポーツ科学専攻修士課程、臨床心理学・保健医療学専攻博士後期課程のチラシを各100部養成校、専門学校、実習地に配布した</p>	<p>10</p> <p>9</p> <p>8</p> <p>9</p> <p>8</p> <p>8</p> <p>8</p>
		当該委員会 達成度集計	60/70
		達成度平均点	86/100

<p>名（内生徒200名）を目指す。</p> <p>【2-2 学修支援】 ②TA(Teaching Assistant)等の活用をはじめとする学修支援の充実 ・担任制度を活用したきめ細かい指導を行う。</p> <p>【2-5 学修環境の整備】 ②実習施設、図書館等の有効活用 1.実習室、演習室は予約簿を作成して学生が積極的に利用できるようにする。 2.専門科目に関する実験室と実習室は担当教員を決めて使用時のアドバイスをを行う。 3.実習室、演習室以外の学修環境について整備、支援する。</p> <p>④授業を行う学生数の適切な管理 ・学期の終わりに授業を行う学生数に関するアンケート調査を行う。</p> <p>【2-6 学生の意見・要望への対応】 ①学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用 ・学習支援に関する学生の意見をさらに把握・分析を行い、その結果について学科教員で共有し改善策を話し合い実行し満足度を高める。</p> <p>基準3. 教育課程 ≪卒業認定、教育課程、学修成果≫ 【3-1 単位認定、卒業認定、修了認定】 ①教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知 ②ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知 ・管理栄養士養成のためのより一層の教育の充実と支援を強化する。 ③単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の厳正な適用 ・単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準については学生便覧の記述通りに厳正に運用する。</p> <p>【3-2 教育課程及び教授方法】 ①カリキュラム・ポリシーの策定と周知 ・カリキュラム・ポリシーを意識したシラバスを作成する。 ②カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性 ・カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーが一貫しているか確認をおこなう。 ③カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成 ・履修マップに示した教育課程がカリキュラム・ポリシーに沿った体型的編成になっているか確認する。 ⑤教授方法の工夫・開発と効果的な実施 ・学部FDを行い、教育方法の能力アップを目指す。</p> <p>【3-3 学修成果の点検・評価】 ①三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用 ②教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック ・学部FDを行い、教育方法の能力アップを目指す。</p>	<p>【2-2 学修支援】 ②TA(Teaching Assistant)等の活用をはじめとする学修支援の充実 ・担任制度を活用したきめ細かい指導を行うべく、学生の多様な特性を確認し、保護者との面談を行った。指導教員への負担軽減をすべく学科長が面談に臨席し、保護者への適切な対応を行った。</p> <p>【2-5 学修環境の整備】 ②実習施設、図書館等の有効活用 1.実習室、演習室は予約簿を作成して学生が積極的に利用できるように総合研究室により、適切な管理を行った。 2.専門科目に関する実験室と実習室は担当教員を決めて使用時のアドバイスをを行った。 3.実習室、演習室以外の学修環境について整備、支援すべく、未使用の部屋の清掃を行い、整備した。</p> <p>④授業を行う学生数の適切な管理 ・学期の終わりに授業を行う学生数に関するアンケート調査をあり方の検討を行った。</p> <p>【2-6 学生の意見・要望への対応】 ①学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用 ・学習支援に関する学生の意見をさらに把握・分析を行い、その結果について学科教員で共有し多様な学生の特性に応じた改善策を話し合い実行し満足度を高めた。</p> <p>基準3. 教育課程 ≪卒業認定、教育課程、学修成果≫ 【3-1 単位認定、卒業認定、修了認定】 ①教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーを策定し、シラバスに明記し周知した。 ②ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知 ・管理栄養士養成のためのより一層の教育を高度化し、充実した支援を行った。 ③単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の厳正な適用 ・単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準については学生便覧の記述通りに厳正に運用した。</p> <p>【3-2 教育課程及び教授方法】 ①カリキュラム・ポリシーの策定と周知 ・カリキュラム・ポリシーを意識したシラバスを作成した。 ②カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性 ・カリキュラム・ポリシーを意識したシラバスを作成し、ディプロマ・ポリシーとの一貫性を確認した。 ③カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成 ・履修マップに示した教育課程がカリキュラム・ポリシーに沿った体型的編成になっているか確認した。 ⑤教授方法の工夫・開発と効果的な実施 ・全学FDに積極的に参加し、教育方法の能力アップを目指した。</p>	<p>9</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>8</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p>
	<p>当該委員会 達成度集計</p>	<p>213/220</p>
	<p>達成度平均点</p>	<p>97/100</p>

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、() 内は責任者 ◎印は優先事項 達成度は x/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	
社会福祉学科 (学科長)	<p>国家試験対策について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新4年生の成績状況に即した対策プログラムを検討する。 ・4年ゼミ及び各課程における対策内容は学科会議で定期的に確認及び情報交換を行う。 ・各科目における国家試験を意識した授業展開・確認テストを行い。下位学年への意識・動機づけを行う。 ・社会福祉士への受験者への取り組みを強化する。 <p>9</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前期インプットを中心とした、勉強方法を確立させる学びを実施。後期においては、小テストを活用し、成績別の対策を実施。下位学年において、国家試験の過去問等を用いた授業展開を実施。 ・学科会議にて半期に2度程度の情報交換実施。 ・社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士とそれぞれの担当者が特講を利用し、対策を実施。社会福祉士への受験者への取組は受験対策中に共同で行った。 <p>国試合格率は、社福 70.4%、精保 100%、介護 85.7%であった。</p>	8
	<ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉士資格取得を基礎に、精神保健福祉士資格取得も可能な実力をもつ学生に精神保健福祉士教育課程配属を認める。 ・1年次に、精神保健福祉士課程を希望する学生には志望理由書を提出させ、1年次の成績(GPA)を参照し、面接を行って課程への配属を決定する 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神保健福祉士課程を希望する学生には志望理由書を提出させ、1年次の成績GPAを参照とし、面接を行って15名の配属を決めた。 	10
	<ul style="list-style-type: none"> ・介護福祉士国家試験全員合格を継続する。 ・ソーシャルワークにおけるケアワークの重要性(生活支援知識・技術の取得)について1年生に積極的に周知し、介護課程選択について奨励する。 ・留学生に1年次より介護福祉士・社会福祉士取得の意識を高めていく ・就職支援プログラムについては、初年次から段階的に取り入れていくことでキャリア意識の形成につなげる。一般企業や公務員対策についてもさらなる充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・介護福祉士国家試験において、試験傾向の変化の影響により、合格率は85.7%であった。 ・1年次の後期「あすなろう」の授業にて、介護福祉士・社会福祉士の資格習得について、毎回レクチャーを行った。 ・留学生においては、エージェントより母国語による意識づけのための説明会を実施。学生支援課・受け入れ施設と協働しながら資格習得の意識づけを行った。 ・就職支援プログラムとして、初年次からキャリア形成につなげよう体系的な取り組みを行った。学外の講師による就職支援講座を開設し、福祉職のみならず一般職や公務員などの多様なキャリア形成につながるためのコンテンツを準備した。 	9
	<ul style="list-style-type: none"> ・介護福祉士課程への配属は令和8年度までとし、令和9年度から社会福祉学科の教育課程を刷新する。 ・そのための、その具体的なカリキュラム改定の案づくりを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・入学定員充足のために介護福祉士資格取得を目的とする外国人留学生確保を継続することとし、介護福祉士課程の停止を1年先送りした。こども家庭ソーシャルワーク課程の設置は、令和9年度から実施する予定である。 	7
	<ul style="list-style-type: none"> ・学科教員FDセミナーを年2回実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学科教員の研究を推進するため、年2回(9月・2月)に実施。研究活動について成果を報告しあうことが出来た。 	9

	<ul style="list-style-type: none"> 九州西部地域大学・短期大学連携事業に参画することにより、福祉活動の大切さを周知していく。 令和6年度と同様に、QSP関連のプログラムを主宰したり、他大学の主宰したプログラムに参加（研修会や各種イベント等）したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> QSP健康ウォークにおける運営において、1年生の全学生が参加し、主体的な取り組みを行った。本活動により、地域支援の重要性と住民とのかかわりの大切さについて学ぶ機会となった。 	9
	<ul style="list-style-type: none"> 今後、外国人留学生の受け入れを継続する。国際的視野での教育を組み入れる。 カリキュラムの改定の検討とあわせて3つのポリシーの検討を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 令和7年入学者35名のうち外国人留学生を10名受け入れた。 カリキュラムの改定については、継続審議中である。 	8
	<ul style="list-style-type: none"> アドミッション・ポリシーの検討を行う。 ミャンマー留学生（10名）の入学に伴うキャンパスライフの受入態勢を整備する。 高大連携事業を推進する。 交換留学生（4名）との交流活動を活性化する。 研究生（7名）から大学院進学に繋げる。 	<ul style="list-style-type: none"> アドミッション・ポリシーは学科将来構想との関係で継続検討中である。 学生ゼミ担当教員および関係委員が学科会議において状況報告を行い、情報を共有したことで、留学生のキャンパスライフを支援する体制の強化につながった。 高大連携事業プログラムのポルタ（佐賀清和高校）を開催（テーマは「人と人のリレーションづくりワークショップ～国境を越えて～」） 交換留学生から大学院進学者2名に繋がった。 研究生6名のうち4名が大学院に進学。 	8
	<ul style="list-style-type: none"> 重点校や実業系高校等の対象を見直し、効果的な広報活動（高校訪問やガイダンスなど）へとつなげる。 学科の学びの特徴として、福祉の多様性とリンクさせリニューアル感を出し、学科の魅力を広く発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> 高校訪問については、入試広報課と連絡を取りながら、積極的に広報活動を行った。進学ガイダンスについては、積極的に参加した。 「〇〇×福祉」と福祉の多様性について、高校生に浸透するように広く学科の広報を行った。 	9
	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程による専門教育の充実と福祉マインドの醸成を図るための学修支援に取り組む。 大学4年間の学修活動を総体的に捉え一貫した教育体制をつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎ゼミナール（前期）・あすなろう（後期）の授業において、福祉マインドの形成を意識した学修プログラムを実施した。新入生の大学生活への適応を促し、4年間の継続的な学修を支える体制づくりの基盤を整えた。 	9
	<ul style="list-style-type: none"> カリキュラム、学びの志向性に応じた図書館の環境整備の促進と図書館掲示板の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> カリキュラムや学びの志向に応じた蔵書（雑誌の継続購読含む）の調整を行った。総研前の図書館掲示板には、適宜、情報の更新を行った。 	8
	<ul style="list-style-type: none"> 精神保健福祉士に必要なスキルの習得に向けて、演習・実習教育では学生ニーズに沿った指導方法の確立と実習先の確保、実習指導者への支援体制の充実を図る。 実習関係書類の電子化に向けた取り組みを進める。 LIFE・介護技術・DXについて、日本における最先端の施設や施設長の講話及び見学を実施する。 介護棟については、他学科との相互利用を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習指導においては、学生のニーズに応じた実習先の選定を行い、実習指導者との連携のもとで個別的な指導体制を整備した。 ソーシャルワーク実習及び介護福祉実習に続き、実習関係書類の電子化に向けて計画的に準備を進め、実習日誌システムの運用を開始した。 令和7年度より精神保健福祉援助実習も実習支援システムを導入し、実習日誌の電子化を図った。 LIFE・介護技術・DXについて、最先端の施設や施設長の講話及び見学を実施。（教員及び学生） 介護棟については、他学科との相互利用を実施した。（スポーツ健康学科・リハ学科・健康栄養学科の実習室の利用） 	9

<ul style="list-style-type: none"> ・学生支援委員会を中心として、学科内での学生支援体制を強化し、学生個々への支援を充実していく。 ・ダイバーシティセンター、学生支援課、学生相談室との連携を強化していく。 ・配慮学生へのサポートにおいて、学生ニーズに沿った対応をしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生支援体制の強化に向けて、学科内において定期的な情報共有を図るとともに、ダイバーシティセンター・学生支援課・学生相談室との連携を進めた。配慮学生への支援については、学生のニーズに応じてゼミ担当教員を中心に学生支援委員と連携し、継続的な個別支援を実施することで、学科としての支援体制の強化を図った 	9
<ul style="list-style-type: none"> ・教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーについて学生便覧・シラバスを通じて周知を継続する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生便覧・シラバスに記載および各授業のガイダンスを通じて周知に取り組んだ。 	9
<ul style="list-style-type: none"> ・単位認定、実習内規、卒業認定等の基準の周知の継続を行い、ディプロマ・ポリシーに基づいた教育を継続する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各種資格に必要な科目や実習の要件について学生便覧・シラバスに記載のうえ、前・後期の各学年のガイダンスおよび実習指導に該当する授業等で、周知に努めた。また学期末には自己評価をもとにフィードバックを行い、卒業時のディプロマ・サブプリメント完成につなげた。 	10
<ul style="list-style-type: none"> ・資格関連科目の履修の順序や履修方法について厳正な適用を徹底し、ディプロマ・ポリシーの実現に向けたカリキュラム・ポリシーの運用を継続する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各資格取得課程において履修ガイダンスを行うとともに、実習の履修の可否においては、実習内規をふまえた課程会議および学科会議の承認を得て実施した。 	9
<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の再編に応じて、カリキュラム・ポリシーの再検討を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の再編に関する検討の過程で、提供する資格やゼミナールのあり方について議論を行った。 	9
<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の再編に応じて、ディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーの再検討を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の再編に関する検討の課程で、本学科の教育プログラムと教育ニーズ、求められる人材像について議論を行った。 	9
<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学科の歴史や強みを活かして、学生や社会のニーズに応じた教育課程の再編成を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程刷新に向けた協議を行い、方向性を示す概念図を作成。学科内での共通イメージを形成・共有した。しかし、学科の将来像に合わせた教育課程の骨格やカリキュラム構成(科目レベル)を具体化するまでには至らなかった。 ・100年ビジョンを踏まえ、教育課程の柱となる方向性が明確となった。 	7
<ul style="list-style-type: none"> ・学科FDにおいて、授業研究などを行い、教員間のピアレビューの機会を増やしていく。 ・学生の授業評価・学修評価の結果を分析し、講義、演習や実習などの授業展開のあり方や教授法について学科全体で検討していく。 ・配慮学生に対する学習支援のあり方について、学科全体で協議し、支援の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・配慮学生に対する授業展開のあり方や教授法については、学生支援委員より学科会議および学科FDにおいて情報共有を行い、学科全体で学習支援のあり方を協議した。これらの取り組みにより、支援体制の充実を図った。 	8
<ul style="list-style-type: none"> ・授業評価データの積極的な活用を行う。 ・オムニバス授業における教員間の情報共有として、定期的なミーティングを継続し、学修成果の点検・評価の結果を学科FDにて報告する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各教員において授業評価や学修評価のデータについて学生支援の観点から分析し、改善に向けた課題の整理を行った。 ・オムニバス授業や複数教員での担当科目については、定期的な情報共有を実施した。今後の課題としては、学修成果の点検や評価の結果に関する報告体制の整備があげられる。 	8
<ul style="list-style-type: none"> ・FD会議を計画・立案し実施する。 ・内容の評価を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・FD会議については、R7年度は、学科会議内で実施した。 	9
	当該委員会 達成度集計	190/220
	達成度平均点	86/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、() 内は責任者 ◎印は優先事項 達成度は x/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	達成度
スポーツ健康福祉学科 (学科長)	基準1. 使命・目的等 《各学科・研究科の強み、特色の明確化》 【1-2 学科のブランドの明確化および変化への対応】 ◎SSP 構想を中心とする連携事業の推進によるブランド力の強化 (継続) (到達目標) ・取り組みの拡充と結果の公表	◎昨年度に引き続き、スポーツ健康科学センターでの「フィットネスチェック事業」を実施し、延べ300人以上のアスリートに測定を実施した。特にスポーツ健康科学センターが、HPSC(ハイパフォーマンススポーツセンター) ネットワーク連携機関指定を受け、国レベルでのアスリート支援が可能となった。「女性アスリート支援事業 (FASpro Saga)」では補助事業3年目として、中高生向けのアスリート健診体制(医療機関での個別健診・本学複数学科の教員による健診後のフォローアップ)をモデル事業として整備、延べ362名の選手が健診に参加、109名の選手保護者が相談会に参加した	10
	【1-3 教育課程への反映】 ◎連携事業の取り組みを活かした教育課程(大学院・学部)の検討(継続) (到達目標) ・関連授業科目への導入検討 ・アスレティックトレーナー(AT)養成課程認定申請の準備を進める	◎「スポーツ健康科学センター」における学生測定スペシャリスト養成を実施し、学科学生に対してスポーツ科学に基づく測定技術やデータ分析方法の指導を行った。その結果、スポーツ科学専攻に3人進学することになった。また、AT養成課程設置に向けた教員採用人事を進め、R8年度より専任教員を迎えることができた。	10
	【1-4 研究活動課程への反映】 ◎連携事業を活かした研究活動の取り組みと外部資金獲得の推進(継続) (到達目標) ・科学研究費を含む外部資金獲得の推進 ・スポーツ健康科学センター運営体制の整備	◎連携事業の成果を各種学会等で公表を行った。また、科学研究費7件採択、約600万円(共同研究含む直接経費)を獲得した。それ以外の外部資金として佐賀県SSP構想連携事業で2件総額約3000万円、他の受託研究費2件で200万円を獲得した。 また、SSP連携事業におけるスポーツ健康科学センター業務を主に担当する教員として助教新規採用人事を進めR8年度より配置できることになった。	10
	【1-5 九州西部地域大学・短期大学連携事業(QSP)】 ○九州西部地域大学・短期大学連携事業への積極的な対応(継続) ・長崎国際大学との連携	○長崎国際大学との教員間交流を進め、下記専門科目講義の一部(1コマ)を相互に担当し実施した。 ・西九州大学「運動生理学演習」 日時:11月7日(金)1限 8:50~10:20 担当:江島弘晃(長崎国際大学) ・長崎国際大学「運動生理学」 日時:12月3日(水)1限 9:00~10:30 担当:山口裕嗣(西九州大学)	9
基準2. 学生 《学生の受入れ、学生の支援、学修環境、学生の意見等への対応》 【2-1 学生の受入れ】 ◎学生募集定員の確保(継続) (到達目標) ・人事を含めたAT導入の具体化 ○アドミッション・ポリシーに沿った入試内容と評価基準の検討(継続)	◎現在(3/19)の入学予定者は、63名(126%)である。OC、学校見学会、高校内ガイダンス、佐賀東高との高大接続科目の実施、高校生アスリートへのフィットネスチェックや健診事業を実施した。SSP連携事業の取り組みや学生スポーツ活動支援を進め、スポーツ活動等で活躍する学生の様子をHPやSNS、学科ニュースでの情報発信が学生数確保につながった。そして総合型選抜入試を含めて小学校教諭二種免許取得を希望する	9	

	<p>◎入学定員確保への効果的な広報活動の検討と強化（継続） (到達目標) ・効果的な広報活動の検討と実施（OC への生徒参加 80 名を目指す）</p> <p>【2-2 学生支援】 ○SA 導入の検討（継続）</p> <p>【2-5 学修環境の整備】 ◎測定を伴う実習環境の整備（継続） (到達目標) ・演習・実習（特に学内実習）を伴う授業の適切な学生数の管理</p> <p>【2-6 学生の意見・要望への対応】 ○学生懇談会の開催（継続） (到達目標) ・年間 2 回実施</p> <p>◎スポーツ系サークル活性化支援（継続）</p> <p>基準 3. 教育課程 《卒業認定、教育課程、学修成果》 【3-1 単位認定、卒業認定、修了認定】 ◎教育目的（教育課程の変更等）を踏まえたディプロマ・ポリシーの検討と運用の評価体制の整備（継続改善）</p> <p>【3-2 教育課程及び教授方法】 ○ディプロマ・ポリシーに基づいた、カリキュラム・ポリシーとアドミッション・ポリシーの見直しとカリキュラムマネジメントの体制整備（新規）</p> <p>○学生の実態に応じた教授方法の工夫と効果的な実施（継続）</p> <p>【3-3 学修成果の点検・評価】 ○三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用結果の検証（継続）</p>	<p>高校生を一定数獲得できた。 また、アスレティックトレーナー（AT）養成課程設置に向け、専任教員の人事を進めることができ、新たな資格設置を学生確保につなげたい。</p> <p>○学生に協力要請をしながら学科イベントや入学前セミナー、新入生ガイダンス、そして「あすなろう」宿泊研修など学修支援に参画してもらった。協力学生に対しては、教員採用試験等大学推薦の対象とする学科基準に制度的に位置付けた。</p> <p>◎スポーツ健康科学センターでの SSP フィットネスチェック事業においてトップアスリートの測定に学生が関わり、また学生の測定スペシャリスト養成を継続的に行った。その中から 3 名が大学院スポーツ科学専攻に進学することになった。さらにセンターが HPSC（ハイパフォーマンススポーツセンター）ネットワーク連携機関指定を受け、国レベルでのアスリート支援体制が整った。</p> <p>○各学年 2 名による代表者出席のもとに年 2 回、前後期終了後に実施した。学生から出された意見や要望に対する検討と対応に努め、結果をまとめて公表した。</p> <p>◎9 つの指定種目への強化費の予算立てを行い、希望サークルに対して選考会を実施し支援を行った。今年度後援会予算に競技力向上支援費 20 万円を新規計上し活用した。さらに学生スポーツのスポンサー制度によりスポンサー企業（バームクーヘンワークス）より、令和 7 年度より 4 年間支援を頂くことになった。</p> <p>◎卒業論文着手や教育実習履修条件などは、各内規に基づいた運用を行い、ガイダンスやゼミを通して各学生の履修カルテを基に周知と点検を丁寧に進めた。 また履修者の成績と学生による授業評価結果をもとに、授業改善につなげるよう教員間で確認した。</p> <p>○全学的に見直したディプロマ・ポリシーに基づいた、カリキュラム・ポリシーとアドミッション・ポリシーの確認を行い、評価基準を学生に分かりやすく作成し直したが、学科のカリキュラムマネジメントとして授業評価体制の整備までは至らなかった。</p> <p>○各講義の特性とそれに見合った教授方法を各教員で見直すとともに、教授方法についての情報を共有しながら継続的に効果的方法について引き続き検討することとした。</p> <p>○学生が作成する履修カルテをゼミで管理し、資格取得を軸に履修指導への活用を進めた。履修カルテは学年進行に沿って教員間で引き継ぎ、個々の学生の履修状況に応じた指導を行った。学科としてその成果を検証する体制には至っていない。</p>	<p></p> <p>9</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>8</p> <p>7</p> <p>7</p> <p>7</p>
--	---	---	--

	<p>○学修成果の点検・評価結果の検証と学修指導等の改善 (継続) (到達目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関連の各種調査結果を踏まえた検討会（学科FD）の実施 <p>【その他】</p> <p>◎大学院スポーツ科学専攻への進学を進める学部の指導体制整備（新規）</p>	<p>○履修カルテに基づいた、学習成果の点検・評価を各教員で進めた。今後その結果をアクティブラーニングに向けた授業改善、学修指導への活用を進める。</p> <p>学科会議での情報共有や学科FDを実施するまでには至っていない。</p> <p>◎学部教育において大学院への接続を意識した内容を取り入れ、特にスポーツ健康科学センターを活用したフィットネスチェックを通して専門的な学びの機会を提供したことにより、令和8年度には学部より3名の進学者があった。</p>	<p>6</p> <p>10</p>
		<p>当該委員会 達成度集計</p>	<p>132/150</p>
		<p>達成度平均点</p>	<p>88/100</p>

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等, () 内は責任者 ©印は優先事項 達成度は x/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	達成度
リハビリテーション学 科 (学科長)	<p>基準1. 使命・目的等 《各学科・研究科の強み, 特色の明確化》 ◎地域社会との連携強化 ◎地域を基盤とする教育機関としてのブランド力の確立 ・自治体や医療機関等と連携して研究・教育・広報活動に取り組む教員を支援する。また学生の地域活動への参加を積極的に進めていく(継続)(連携予定:吉野ヶ里町, 太良町, MIZ, CHILWELL 産前産後支援事業, 佐賀電算センター, 高校部活) ・認知症カフェ(江北町・鹿島市)など地域の高齢者の生活支援に取り組む(継続) ・高大接続科目として高校生を対象にリハビリテーション学へのとびらを開講する。</p>	<p>基準1. 使命・目的等 《各学科・研究科の強み, 特色の明確化》 ◎地域社会との連携強化 ◎地域を基盤とする教育機関としてのブランド力の確立 【自治体との連携】大木町:健康増進共同プロジェクト(3/13)80名, 白石町:乳児検診, 佐賀市:認知症初期集中支援チーム委員(11回), 神崎市:地域ケア会議アドバイザー(6回), 鳥栖地区広域市町村圏組合:みんなの介護塾・男の介護塾(10回), 3者間連携関連(神埼警察署・吉野ヶ里社協):介護予防事業など(30回), 江北町・鹿島市:認知症カフェ(10回), 太良町:高齢者の健康づくり事業(40回) 【企業との連携】溝上薬局:大人の測定会(9/9・3/10・3/11)143名参加, SDCソリューションズ:尿漏れ対策講座(8/4・8/6)20名ずつ, DFree:骨盤底筋トレーニング講座(10/15)100名 【その他連携】佐賀清和高校サッカー部:フィジカルサポート(5/10, 12/10)80名ずつ, 寄せ植えコンテスト:参加高校5校, 地域病院との共同研究・成果発表など</p>	10
	<p>基準2. 学生 《学生の受入れ, 学生の支援, 学修環境, 学生の意見等への対応》 ◎学生受け入れ, 学生の支援, 学修環境の整備, 学生からの意見への対応(継続).</p>	<p>基準2. 学生 《学生の受入れ, 学生の支援, 学修環境, 学生の意見等への対応》 ◎学生受け入れ R08年度の入学予想数は, 理学35/40名(87.5%), 作業12/30名(40.0%), 収容定員243/300名(81.0%)(2026.03.31現在)</p>	7
	<p>◎留学生在が複数名入学するため, ダイバーシティセンターと協力して学生支援に努める(新規)</p> <p>○学部独自の就職説明会の実施(継続). ○指定規則改正に伴う臨床実習指導者講習へ協力をを行い, 安定的な実習地の確保・新規開拓に努める(継続). , 高校訪問, 在学生を通じた母校への広報活動, 卒業生へ高校生へのPT・OT職業理解促進の協力を進める(継続). ○総合型選抜など年内入試に力を入れる. ◎PT専攻は1.3年生が定員を超過するため実習地の確保に尽力する。(継続)</p> <p>【到達目標】 ・就職率100%継続. ・学科定員充足率90%以上</p>	<p>◎学科独自の広報活動継続 R07年度も在学生を通じた母校への高校への広報活動, OC工夫, 横断幕・テーブルクロスのイベントでの設置, SNS情報発信を行った. 高校訪問74校, 高校ガイダンス17校, 学内見学対応2校, 寄せ植えコンテスト参加5校, オープンホスピタル(養成校紹介)参加2回 ◎就職支援 50か所の病院に参加いただき学部独自の就職説明会を実施した(継続). 教員の手厚いフォローにより就職率はPT100%, OT100%を継続している. ◎学生の支援 R07年度5名の留学生, また配慮学生の急増により教員が多くの時間を割いて生活・学修フォローを行った. またPT1・3年生が定員を大幅に超過しており新規実習地の確保に尽力し, 適正な実習配置・実習滞在費使用が出来た. また臨床実習指導者講習会を各専攻県士会と養成校が共同開催し, 安定的な実習指導者の確保に努めた. 一方で学修指導の必要な学生が急増しており, 実習地訪問増加・学修援助時間増加, 国家試験対策負担増加などに追われ学修環境の低下が喫緊の課題となった.</p>	7
<p>基準3. 教育課程 《卒業認定, 教育課程, 学修成果》 ◎第3者によるカリキュラムチェックを行い, ディプロマポリシーアドミッションポリシーを点検する(継続). ○教員資格及び教育内容の自己点検・自己評価を実施・公表(継続).</p>	<p>基準3. 教育課程 《卒業認定, 教育課程, 学修成果》 ◎第3者によるカリキュラムチェックを行い, ディプロマポリシーアドミッションポリシーを点検した(継続). また定期的に学科・専攻会議を行い, 学部方針・カリキュラムについて意見交換や情報共有を図り, 第5次カリキュラムを問題なく運用出来た.</p>	7	

<p>○4年卒業率、国家試験合格者の向上に努める。(継続)</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> 卒業率80%以上. 国家試験合格率100%達成. <p>基準4. 教員・職員 《教学マネジメント, 教員・職員配置, 研修, 研究支援》</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎教員・職員の安定的な配置を検討する。(新規) ◎研究活動の活性化(継続) <ul style="list-style-type: none"> ・地域連携に寄与する研究の実施と充実(継続). ・科研をはじめとする外部資金応募数・採択数の増加(継続). ・地域の自治体や医療機関との共同研究の推進(継続). ◎PT/OT 養成施設ガイドラインに基づく自己点検の実施・公表(継続). ○教育・研究経費の適正使用と節約の実施(継続). <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受託研究継続 ・科研費応募率90%以上継続 ・科研費採択率30%以上を目指す ・その他外部資金応募率・採択率の向上 ・学部教員配置の適正化 <p>基準5. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎学部同窓会との連携 <ul style="list-style-type: none"> ・同窓会との連携を図り, 卒業生の活動を支援する(継続). ・学部創設20周年に向けて, 同窓会と学部が連携して準備を進める. 	<p>○教員資格及び教育内容の自己点検・自己評価を実施・HPにて公表した(継続).</p> <p>○16期生4年卒業率PT29/41 70.7%・OT15/18 83.3%, 国家試験新卒合格率PT26/31 (83.9%)・OT116/20 (80%)であった. 卒業率向上のため, チューター・ゼミ・担任が協力して面談など修学指導を実施した.</p> <p>基準4. 教員・職員 《教学マネジメント, 教員・職員配置, 研修, 研究支援》</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎教員・職員の安定的な配置を要望・検討を継続した. 事務から学科への業務移管による業務を教員で分担して行った. しかし, 助手未配置により学生支援を含めた助教の業務負担が増大し, 業務ならびに研究環境・学生の教育環境の低下が懸念される状況である. ◎研究活動の活性化 教員の業務負担が増加する中, 各教員の努力と学科の研究活動を支援する体制づくりにより, 多くの成果をあげることが出来た. R07年度科研応募18/20名(90%), 採択9件(45%) (継続含), 外部資金応募8件, 採択5件(継続含む). また企業からの受託研究や地域の自治体や医療機関との共同研究・成果発表も実施した. ○教育備品・設備について 指定規則・養成校ガイドラインに基づき備品管理に努めた. ◎養成施設指導ガイドラインに基づき自己点検・自己評価を実施し公表した. しかし, 教員業務負担増加に伴い, PT・OT 養成施設等教員長期講習会に参加することが数年出来ていない. 指定規則を満たすためにも計画的に講習会に教員を派遣する必要がある. ○教育・研究経費の適正使用と節約を行う. <p>基準5. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎学部同窓会との連携 同窓会との連携を図り, 卒業生の活動を支援した. また, 次年度に実施する学部20周年記念事業について同窓会への協力を依頼し, 事業内容・予算について大学へ相談を開始した. 	<p>8</p> <p>10</p>
	<p>当該委員会 達成度集計</p>	<p>42/50</p>
	<p>達成度平均点</p>	<p>84/100</p>

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括と

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	達成度
子ども学科 (学科長)	<p>基準1. 使命・目的等 <<各学科・研究科の強み、特色の明確化>> 中期目標 1-2:学部学科・研究科のブランドの明確化および変化への対応 中期計画:学部学科・大学院の各特色を実践する教育機関としてのブランドの確立 計画事項:学科の特色の創出及びブランド力の構築 【到達目標】 ◎学部学科の「社会的使命」を念頭に、定員充足で満足することなく、「質の高い教員」の養成、特に「保育・幼児教育の担い手」としての学生教育に力を入れ一層のブランド力強化を図る。</p>	<p>学科の「社会的使命」の大きな柱として、「保育・幼児教育人材の育成」がある。R6 年度末に締結した保育関係団体と保育士養成校による「六者協定(こども未来創造 Project6SAGA)」の中心となり、高校をはじめとした各種団体と協力して、まずは「保育人材確保」の入口としての学生募集に力を入れた。教員採用試験での高い合格率と相まって、結果的に定員を上回る入学生を確保できそうである。</p>	10
	<p>【到達目標】 ◎学科の特色及びブランドを反映した教育課程の再考を行い、その特色の明確化とブランド力の構築にむけた教育課程の改善を図る。また、附属園との共同研究を推進し、ブランド力強化に努める。</p>	<p>附属幼稚園・保育園と協力して、実習日歯を中心とした実習内容改善のための WG を立ち上げて継続研究を行っている。また、「こども未来創造 Project6SAGA(六者協定)」の中心として、「質の高い保育士・教員の養成校」としてのブランド力強化に努めた。</p>	10
	<p>【到達目標】 ○学科のブランドに関連した研究課題「特別支援に強い教員・保育者養成プログラムの構築」の継続研究を行い、研究推進に向けた研修等を実施する。 ○研究活動の促進と充実のため、外部資金獲得の推進を図るために、外部資金申請率 60%以上を目指す。</p>	<p>学科のブランド力教科に関連して「特別支援教育に強い教員・保育者養成プログラムの構築」の継続研究を行い、本年も「発達障害支援フォーラム」を開催した。 外部資金獲得の推進を図り、情報交換や研修会を実施したが、目標の申請率 60%を達成することはできなかった。</p>	8
	<p>【到達目標】 ○学科の特色を活かし、九州西部地域大学・短期大学連携事業に参画する</p>	<p>QSP(九州西部地域大学・短期大学連携事業)の事業の一つ、西九州大学主催「健康ウォーク 2025」に参加し、学科の特色を活かした展示・実演を行った。 QSP 参加校による共同 FD・SD 研修会に積極的に参加した。</p>	10
	<p>【到達目標】 ○学科の特色及び教育目的を明確にし、アドミッションポリシーの再考・策定を継続して行う。 ○アドミッションポリシーを周知する 為の情報発信媒体を検討・作成し、広報活動に活用する。</p>	<p>昨今の動向を鑑みて、「3つのポリシー」の再確認・点検を行った。新入生を対象に「入学(志願)理由」、「受験時の併願校」等について調査し、アドミッションポリシーとの適合性と周知のあり方について検討した。大学の HP・学科の SNS 等を通して、学科の様子を伝え、3つのポリシーの周知を図った。</p>	10
	<p>【到達目標】 ○入学者受入れの実態とアドミッションポリシーの関係、及び入試結果と入学後の学修状況との関係について、分析を行う。</p>	<p>入学者受入れの状況について佐賀県内の高校を訪問し、送り出す高校側の指導内容等について調査するために学科独自の高校訪問を実施した。また、入試結果と学修状況(GPA)の関係について検討した。</p>	10
	<p>【到達目標】 ○学生募集活動について、引き続き、他大学の情報収集を行い、その上で過去 5~10 年間の取り組み及び令和 7 年度入試傾向を検証し、入学定員に沿った学生受け入れ数の維持を図る。</p>	<p>「(指定校・学校長推薦)」「総合型選抜」の「年内入試」と「一般入試(I~II期)」、共通テスト利用(I~III期)の「年明け入試」の実態について、過去 5~10 年間の入試傾向を検証し、入学定員に沿った学生受け入れ数の維持の方策について検討した。結果的に定員を上回る入学生を確保できそうである。</p>	10
	<p>【到達目標】 ○学生の学修の実態について、学科教員間の共有を図りつつ、引き続き、学期末及び学期始めに把握し、指導に当たる。なお、実態把握の為の的確な方法や時期、必要な支援内容及び</p>	<p>学修面をはじめ生活面も含めて学生の生活実態を把握するために、ゼミ担当教員による個別面談・相談を実施した。 要配慮学生の状況など、共有すべき情報については、毎月の学</p>	10

体制の検討を行う。	科会議で情報共有を行った。学科FD研修会を実施して、学生の学修状況の把握と改善策について検討した。	
<p>【到達目標】 ○子育て支援室、保育演習室、表現スタジオ、ML 教室、音楽室等の学生が実践的な学び場としての有効活用に関して継続検討を行う。</p>	表現スタジオ、ML 教室、音楽室等の有効活用に加え、地域と協力して実践的な学びの場の整備・充実に努めブランド力強化を図った。	9
<p>【到達目標】 ○授業を行う学生数の適正化について早期からの検討を定期的、継続的に行う。</p>	「教育の質向上」のために多人数による授業を避け、演習科目を中心に必要に応じて多クラス展開で授業を実施した。	10
<p>【到達目標】 ○全学的に行う学生への意識調査の分析を有効活用しつつ、学修支援に関する学生の意見を把握する方法を再検討する。そのうえで学修支援への活用を図る。</p>	学生を対象とした定期的な「調査」とは別に、ゼミ担当教員との面談など日常的な学生と教員のコミュニケーションの中から学生の「生の声」を取り上げ、必要に応じて、学科会議などで対応について検討した。	9
<p>【到達目標】 ○ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの再考と周知、及び両者の整合性について、引き続き協議し検証を行う。</p>	定期的で開催している「学科将来構想WG」等において学生の実態を把握しながら、3つのポリシーの見直しを行った。	10
<p>【到達目標】 ○「学びの質」向上に向けて、単位認定、実習内規、卒業認定、修了認定基準の確認及び周知について、引き続き検証を行う。</p>	「卒業要件」について、従来の「単位数の充足に加え、GPA2.0」を付加して「学びの質向上」を目指す。学期ごとにきめ細かな面談を通した学修指導を実施した。	10
<p>【到達目標】 ○単位認定、実習内規、卒業認定、修了認定基準の確認及び周知と厳正な適用について、引き続き検証を行う。</p>	本年度は、特に「キャップ制」に基づいた、履修指導を丁寧に行い、「実習時期の見直し」に伴う科目の開講時期の変更など「学びの充実」のために教育課程の再検討を行った。	10
<p>【到達目標】 ○教育課程に沿ったカリキュラム・ポリシーの再考を継続して行う。</p>	教育課程に沿ったカリキュラム・ポリシーの再考と周知、及び両者の整合性について、継続的に検討を重ねている。	10
<p>【到達目標】 ○教育課程に沿ったディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの再考と周知、及び両者の整合性について、継続的に検討を行う。</p>	教育課程に沿ったディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの再考と周知、及び両者の整合性について、継続的に検討を重ねている。	10
<p>【到達目標】 ○カリキュラム・ポリシーに即した教育課程の体系的編成の検証を引き続き行う。</p>	教育採用試験の前倒し実施及びキャップ制の適切な運用という両面から、カリキュラム・ポリシーに即した教育課程の体系的編成の検証を継続的に行っている。	10
<p>【到達目標】 ○学生の実態に応じた教授方法の開発と効果的な実施について、学科内での情報共有及び取り組みの検討を継続して行う。</p>	学生の実態把握として、学修状況の把握に留まらず、その背景となる要因について、FD研修会を実施した。	10
<p>【到達目標】 ○三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価の実態把握と学科内での共有方法等について、再考と検証を行う。</p>	三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価の実態把握と学科内での共有方法等についてFD研修会を実施した。	10
<p>【到達目標】 ○学修成果の点検・評価結果に関する学生・教員双方向のフィードバック体制に関する検討を行う。</p>	学修成果の自己評価に関する評価内容・評価方法についてFD研究会を実施した。	10
	当該委員会 達成度集計	196/200
	達成度平均点	98/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	達成度
心理カウンセリング学科 (学科長)	<p>【基準1 使命・目的、教育目的】</p> <p>1-2 学部学科・研究科のブランドの明確化および変化への対応</p> <p>●学部学科・大学院の各特色を实践する教育機関としてのブランドの確立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学科の特色を生かした地域支援、卒後教育(学科同窓会)の実施、進路決定支援を行う。1年あたり、卒後教育を1回以上、地域の協定先や職能団体との情報交換を、のべ3回以上実施。 ・中高教員向けを想定したカウンセリングマインド向上研修会を実施する。 ・九州心理学会第86回佐賀大会の開催に協力する。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報交換会の議事録 ・研修会実施報告書 ・PR チラシ 	<ul style="list-style-type: none"> ・第11回学科研究大会、同日に卒後教育を実施した(資料1-2-1, 1-2-2abc)。 ・協定先との情報交換を4回行った(資料1-2-3ab)。 ・カウンセリングマインド向上研修会を計2回実施した(資料1-2-4abc)。 ・「九州心理学会第86回大会」および「高校生のための心理学講座」を佐賀キャンパスにて開催した。佐賀女子短期大学と本学科が幹事校として運営に携わった(資料1-2-5abc)。 	10
	<p>1-3 教育課程への反映</p> <p>●各特色の教育課程への反映</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新カリキュラムへの移行を行いつつ、特色を教育課程に反映させる。 ・教育・学校心理学にてLGBTQ+の理解を啓発するための授業を展開する。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業を行ったことを紹介するホームページ上の記事 	<ul style="list-style-type: none"> ・新カリキュラムへの移行が2年次まで終了した。小城市の小学校ボランティアに対する授業科目を令和7年度から専門教育科目に移動した。 ・教育・学校心理学の講義内において、性的マイノリティであるLGBTQ+への理解促進のための講義を行った(資料1-3-1) 	10
	<p>1-4 研究活動への反映</p> <p>●各特色の研究活動への反映</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関連学会等や講座の開催、学位論文や相談ケースに基づく学生・卒業生の研究発表を促進する。残り3年間で、学会や講座を9回以上、学生・卒業生による研究発表を5件以上実施する。 <p>科研費を含めた外部助成研究の申請率60%以上</p> <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学会や講座のチラシ ・論文集の目次等 ・科研費等の申請リスト 	<ul style="list-style-type: none"> ・関連学会等や講座の開催(5件):6月15日に佐賀県公認心理師協会 年次総会、9月28日に佐賀県公認心理師協会学校臨床委員会、10月19日に国際テレドラマ協会第6回年次大会、11月29日に九州心理学会第86回大会、2月8日に日本箱庭療法学会主催九州・沖縄地区箱庭制作研修会を本学で開催した(資料1-4-1abcde)。 ・学生・卒業生の論文投稿(1件)・研究発表(5件):2026年3月の子ども学部紀要第16号に1名の卒業生の論文が採択された。また11月29日の九州心理学会第86回大会で在 student と卒業生4名が、12月27日の日本学校心理学会第27回大会で卒業生1名が学会発表した(資料1-4-2ab)。これにより「学生・卒業生による研究発表10件以上」という中期目標を3年で達成した。 ・科研費を含めた外部助成研究の申請率が62.5%であった(資料1-4-3)。 	10
	<p>1-5 九州西部地域大学・短期大学連携事業</p> <p>●九州西部地域大学・短期大学連携事業への参画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和7年度もQSP健康ウォーク事業の継続が予定されているため、引き続き学科ブースにて地域住民の心の健康に役立つ企画を行い、学科や大学・学園の地域住民への周知につなげていく。高大連携の機会として、高校生の受け入れも積極的にやっていく。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・QSP参加を報告するホームページ記事 	<ul style="list-style-type: none"> ・QSP健康ウォーク事業において、学部生3名の協力も得ながら「ストレスチェック」を実施した。185名の来場者を対象に、ストレス対処法の解説を行った他、佐賀市が作成した地域の各種相談機関のパンフレットを配付し、地域連携事業に積極的に寄与した。高大連携の機会として学科ブースに高校生2名の受け入れを行い協働した(資料1-5-1)。 	10

	<p>基準2 学生の受入れ、学生の支援、学修環境、学生の意見等への対応</p> <p>2-1 学生の受入れ</p> <p>●教育目的を踏まえたアドミッション・ポリシーの策定と周知</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アドミッション・ポリシーの検討と選抜方法の検討、高校現場での周知をはかる。高校訪問は九州北部への継続訪問を検討するほか、佐賀、福岡南部の高校教員を対象とするカウンセリング力向上研修や、高大接続授業を通してポリシーの浸透を高める。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学科会議議事録 ・入試要項 <p>●アドミッション・ポリシーに沿った入学者受入れの実施とその検証</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アドミッション・ポリシーに沿った入学者受け入れの実施と検証を行っていく。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教授会資料 ・入試要項 <p>●入学定員に沿った適切な学生受入れ数の維持</p> <ul style="list-style-type: none"> ・HP および学科公式 SNS による情報発信の強化をおこなう。HP および SNS への投稿を年間 90 件以上目指す。 ・学科広報サポーターによる情報発信の強化、サポート体制構築の強化を図る。 ・高校訪問、進路ガイダンスを積極的に実施する。 ・出張講義、高大接続授業を実施する。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・HP、SNS 記事の掲載日およびタイトル一覧 ・広報サポーター活動記録、学科報の記事等 <p>2-2 学修支援</p> <p>●TA (Teaching Assistant) 等の活用をはじめとする学修支援の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・TA の活用、他学年交流、学科独自の学修支援を継続する。1 年あたり、TA 参画 80 時間以上、他学年交流を 5 回以上実施する。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・TA 出勤簿 ・他学年交流 HP 記事・ゼミ日程表 ・キャリアアップ講座テキスト ・アセスメントテストの評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・7 月～9 月の学科会議でアドミッション・ポリシーを改正した。 ・カウンセリングマインド向上研修会を開催した。佐賀県内のみならず福岡県南部の高等学校の教諭らが参加した。のべ 45 名の参加に至った (資料 1-2-4abc 再掲)。高大連携授業では、佐賀清和高校の授業にて 12 名の生徒が参加した (資料 2-1-1)。 <ul style="list-style-type: none"> ・2021 年度入学生の進路決定率は 80% 以上であり、留年者、退学者を除いた場合 100% である。また、退学した学生 1 名は一般 I 期での入学であった。ただし、総合型選抜で入学した 7 名のうち 3 名が GPA1.0～1.9 である。そのため、引き続き検証していく必要がある。なお、他の入試形態において同 GPA では、学校長推薦 II 期の 1 名のみであった (資料 2-1-2abc)。 <ul style="list-style-type: none"> ・大学 HP および学科公式 SNS にて、授業紹介や大学学科行事の様子についての情報を発信し、積極的な広報活動を行った (年間掲載実勢数 HP65 記事【前年度実績 HP73 記事】、SNS172 記事【前年度実績 SNS154 記事】、合計 237 記事【前年度実績 227 記事】/2 月末現在) (資料 2-1-3ab)。 ・大学、学科の魅力や学生が主体となって発信していく為に、学科広報サポーターを募集し、広報活動の体制構築を図った。主に、HP や SNS の記事執筆やオープンキャンパスの展示物作成に携わってもらい、学科の魅力や特徴を学生が主体となって発信できる機会を多く持てるように工夫した (資料 2-1-4)。 ・学科広報冊子および学科オリジナルのリーフレットを作成・配布し、広報活動を行った (資料 2-1-5abcd)。 ・進路ガイダンス 14 校、高校訪問については、夏季は 27 校、冬季は 15 校の合計 42 を訪問した (2 月末現在)。 <ul style="list-style-type: none"> ・「心理学実験 I」「心理学実験 II」「芸術療法」「芸術療法 II」「心理演習」における TA の活用 93 時間行い、学生の学修支援を行った (資料 2-2-1)。 ・他学年交流について、4 年生が 2・3 年生に進学や就職活動の助言をする機会、4 年生が 3 年生に小学校子ども支援ボランティア活動について報告する機会、3 年生が 2 年生にインターンシップの報告・助言を行う機会、上位学年のゼミ発表会に下学年が参加する機会を得た (資料 2-2-2abcd)。 ・1 年次「キャリアアップ講座」については、IRT テストの結果から学生を選定し、授業担当教員が対象学生への指導に用いる独自のテキストを作成し授業に使用した (資料 2-2-3ab)。 ・2 年次「キャリアアップ講座 II」の受講者には、アセスメントテストを受講開始前、受講最終日に 2 回実施し、授業内容の確認資料として用いた。また、毎回グループワークを実施し、組織的役割を学生各自に体験させ、社会人基礎力の向上に努めた。 	<p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p>
--	---	--	---

	<p>2-5 学修環境の整備</p> <p>●実習施設、図書館等の有効活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨床心理相談センター・図書館（データベース含）の活用、及び、検査・実験室設置と統計ソフト購入へのアクションを起こす。1年あたり、相談センターを使った授業を4コマ以上、図書館（データベースを含）利用講座を3コマ以上実施する。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業資料、写真 <p>●授業を行う学生数の適切な管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習演習、ゼミ等における適切な学生数及び教員数の管理を常時行う。 ・公認心理師養成のための実習演習担当教員講習会に応募、出席する。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習演習担当講習会修了証 <p>2-6 学生の意見・要望への対応</p> <p>●学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、学生の学生生活実態調査と個別指導を通じた状況把握と共有化を行う。1年あたり、全学生の個別面談を2回以上実施する。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・面談日の記録 <p>基準3 卒業認定、教育課程、学修成果</p> <p>3-1 単位認定、卒業認定、修了認定</p> <p>●教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの周知と必要による再設定を行う。1年あたり1回以上、全学年にディプロマ・ポリシーを周知する。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学期ガイダンス資料 <p>●ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ディプロマ・ポリシーを踏まえた科目履修条件、単位認定基準、資格課程認定基準等の検討、策定と周知を行う。1～3年生に対して心理実習、GPA、卒業研究履修の内規を毎学期伝える。3～4年生には卒業認定基準を伝える。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学期ガイダンス資料 <p>●単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の厳正な適用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科目履修条件、単位認定基準、資格課程認定基準等の適用を行う。資格課程認定会議を年1回開催 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資格課程認定会議議事録 <p>3-2 教育課程及び教授方法</p> <p>●カリキュラム・ポリシーの策定と周知</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム・ポリシーのホームページ掲載を続ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床心理相談センターを使った授業が、「芸術療法Ⅰ」、「心理演習」、「カウンセリング演習Ⅱ」で合計9コマ行われた。また、図書館（データベース）利用講座は、「1年生の後期ガイダンス」、「心理学研究法」、「心理学実験Ⅰ」で合計3コマ行われた（資料2-5-1abc、資料2-5-2ab）。また、心理学実験・検査室を開室させるとともに、統計ソフトIBM SPSSのバージョンアップを行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・学生15名に対し教員1名の配置で演習、実習指導が行うことができるよう教員を配置した。心理実習に関しては、各ゼミ担当者が履修状況を把握し、実習に必要な履修について2年次、3年次の学生に周知した。 ・公認心理師のための実習演習単教員講習会に応募し、今年度は2名の教員が受講することができ、担当教員資格を取得した（資料2-5-3ab） <ul style="list-style-type: none"> ・従来の学生生活実態調査を改訂した学生調査の結果をもとに、学生の傾向を把握した（資料2-6-1）。また各学年ゼミナールにおいて定期的に個別面談を実施し、学生の状況把握や意見・要望把握を行い、学生状況に応じた対応、関係教員との情報共有を行うことができた。各学年1年に2回以上の面談を行うことができた。（資料2-6-2abcdefg） <ul style="list-style-type: none"> ・1～4年生の各ゼミ主任が、ガイダンス時に学生へディプロマ・ポリシーの周知確認を実施した（資料3-1-1abc）。 <ul style="list-style-type: none"> ・1～4年生の各ゼミ主任が、前期・後期のガイダンス時に「心理実習」履修基準、卒業研究履修基準、GPAによる履修指導基準の周知確認を実施した（資料3-1-2ab）。 <ul style="list-style-type: none"> ・学科教務委員、ならびに1～4年生の各ゼミ主任が、担当学年の成績・単位取得状況・GPAの得点状況確認を、前期・後期に実施した。卒業研究履修・心理実習の履修条件が満たせなかった学生・GPAの基準、卒業単位未修得者の確認を行い、令和7年3月学科会議で学科教員全員による判定会議を行った。その後関係教員は学生・保護者への説明・指導を実施し、令和7年4月に指導の進捗状況を学科会議にて報告、周知を図った（資料3-1-3）。 <ul style="list-style-type: none"> ・7～9月の学科会議で新しいカリキュラム・ポリシーを策定した。しかし令和7年度中の周知は行われなかった（資料3-2-1abcd）。 	<p>10</p> <p>9</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>9</p>
--	--	--	---

	<p>●カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育課程、カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーがより一貫性をもつよう検討を行う。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学科会議議事録 <p>●カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新カリキュラムへの移行を進める。 <p>●教授方法の工夫・開発と効果的な実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FD 研修会の実施、教授方法の開発や評価に関する実践報告・研究発表の促進をする。FD 研修会を1年あたり1回以上開催、教授方法に関する報告・発表を残り3年間で2回以上実施。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FD 研修会記録 ・報告・発表の原稿や目次 <p>3-3 学修成果の点検・評価</p> <p>●三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、学修成果の点検・評価方法の運用をはかる。各期のガイダンスにおいて直前期の自己評価について学生に実施してもらい、学修成果の自己評価実施率を80%以上にする。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポータルサイトの入力済表示 <p>●教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック</p> <ul style="list-style-type: none"> ・引き続き学修成果の可視化を用いた学生指導及び学修成果への自覚を促す教育の実施をはかる。学修成果の可視化を用いた指導を、1～3年生に対し1年あたり1回以上実施する。 <p>エビデンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・面談日の記録 	<ul style="list-style-type: none"> ・7～9月の学科会議で、公認心理師の養成モデルを参考に新しいディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを関連付け、どの科目群がどのディプロマ・ポリシーに関係しているかを明確にした（資料3-2-labcd再掲）。 ・新カリキュラムへの移行が2年次まで終了した。一方で、新しいカリキュラム・ポリシーが策定されたが、教育課程の見直しは不要として現行のままとした。 ・教授方法の開発や評価に関するFD研修会が、3月12日に全学単位で行われた。その研修会において本学科教員1名が発表を行った（資料3-2-2）。 ・今年度は、各学年末に学修成果の自己評価を実施し、各ゼミ個別指導において自己評価の確認を行った。卒業予定者の学修成果の自己評価実施率は100%だった（資料3-3-1）。1～3年生の自己評価は3月末に実施される。 ・今年度は、1～4年生に対して、フィードバックを1回実施した。各学年末のゼミ個別指導の際、単位履修状況確認と同時に学修成果の自己評価の確認を行い、過小評価・過大評価の学生には自己評価状況の詳細の確認と、今後の学修における留意点について指導した（資料3-3-2）。 	<p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>10</p>
		<p>当該委員会 達成度集計</p>	<p>198/200</p>
		<p>達成度平均点</p>	<p>99/100</p>

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括と

担当は関係委員会等、() 内は責任者 ©印は優先事項 達成度はx/10

区分及び 担当	令和7年度検討 および実施事項	令和7年度総括	達成度
看護学科 (学科長)	<p>基準1. 使命・目的等 《各学科・研究科の強み、特色の明確化》 【1-2 学部学科・研究科のブランドの明確化および変化への対応】 ◎地域看護研究研修センターを中心に学科の特色を生かした公開講座などの企画・実施 1) 研修センター事業 実習指導研修会1回、公開講座2回、健康教室2回を計画し、大学院生募集は、集客を上げるため、指導者研修や公開講座等の看護職が参加する機会に盛り込むこととする。また、実施時は事前の予算計画書をもって実施にあたることとした。様々な機会を設け、学部・大学院の広報を行い、地域へのアピール、地域貢献につなげる。</p> <p>2) 看護学科の魅力発信に重点を置き、高校訪問、出張講義、OC、国スポ・全障スポ、学園祭の子宮がん検診、ようかん祭りなどの機会をとらえて、学生を積極的に参画させることにより、受験生とその保護者および地域住民に本学科をアピールする。</p> <p>3) 大学教員が地域での講演・公開講座は依頼を受けやすくなるため、出張講義ガイド等を全員が提出し、周知する。</p> <p>4) 西九州大学と連携協定校への講義の実施（看護学へのとびら）</p> <p>5) 小城市との包括連携協定では、引き続きスポーツ大会での交流や、小城市に地域おこし隊が着任することから、協力し合える事業の内容を包括会議で検討する。 市のイベント：ようかん祭り等への学生の主体的な参加協力により地域への周知と地域貢献を行う。</p>	<p>基準1. 使命・目的等 《各学科・研究科の強み、特色の明確化》 【1-2 学部学科・研究科のブランドの明確化および変化への対応】 1) 研修センター事業 年間計画通り、実習指導研修会1回、公開講座2回（認知症の予防と地域支援、養護教諭のためのICTセミナー）、健康教室2回（プレパママ教室2回を実施し、いずれも学生ボランティアが参加した。アンケート結果からもプレパママ教室では沐浴や育児指導を事前に練習し、本番で実演・指導を作成した資料を活用し学生が主体になり実施し対象者の満足度は高かった。地域の方々の参加・グループワークは満足度も高く2月・3月実施のまちカフェの活動につながった。看護学部や大学院の紹介も専門職向け講座で紹介し、地域向け講座の場合もガイドブックやパンフレットを提供した。今年度は実習病院唐津赤十字病院の11部署の看護師へ研究指導を組織的に支援し、佐賀県内学会発表までできた。</p> <p>2) 高校訪問・出張講義・進路ガイダンス(29件)の依頼はすべて引き受けた。OCに加え小城市のようかん祭りの機会をとらえて、学生を積極的に参加させることにより、高校生とその保護者及び地域住民に本学科のPRに努めた。また、今年度から新たに在校生10名が各出身高校を訪問して本学をPRする取り組みを実施し、高校の受け入れが良好であった。</p> <p>3) 教員が地域での公開講座等の依頼を受けやすくするため、出張講座ガイドに年度当初から在籍する教員全員が講義テーマと内容を掲載した。出張講義ガイドを活用した小城市から依頼の生涯学習：小城市の大人塾の講義の依頼を受け、終末期の意思決定支援、ストレスマネジメントや進路ガイダンスや高校からの講義依頼から発展した性教育や災害支援・対策など依頼を受け、地域に教員の専門性の周知につながった。</p> <p>4) 西九州大学・小城高校・牛津高校・小城市の包括連携協定校への講義の実施（看護学へのとびら）を行い、21名の受講があった。看護学へのとびらの実施は小城高校以外の県内高校へ広がりを見せた。日程調整の課題が残った。</p> <p>5) 小城市と高校の包括連携協定はお互いのスムーズな情報交換により、高校の文化祭・成果発表・給食参観への大学教員の参加、プレパママ教室への高校生参加など互いの刺激を受け、相互理解にもできた。また、昨年から開催している学友会主催のスポーツ大会を小城高校・牛津高校・小城市役所職員との交流イベントを実施し、全体で72名の参加があり、今後も継続したいとの意見が多数寄せられた。小城市長・学長・校長の参加もあり熱気があった。地域おこし協力隊の着任後の活動により地域の企業等に協賛を求め、22企業等から協賛品を頂くことができ、景品として参加者に配分することができ、盛り上げることができた。企業からのチームも参加するなど、年々交流が活発化している。 また、ようかん祭りでの学生によるハンドマッサージの実施では138名の来場者があり、9名のボランティア学生が対応して大変好評であり、大学の周知を図ることができた(エビデンス：R7年度第18回学科会議資料)。大学の入試要項を20部配置したところ、すべてなくなるなど、広報の場としての活用も可能と思われる。</p>	10

	<p>6) 大学院(看護学専攻、保健医療学部)のアピールを公開講座や出張授業の際に行う。</p> <p>エビデンス : 高校訪問、出張講義一覧、OC 資料、看護学へのとびら時間割、終了後アンケート、研修センター事業報告書</p> <p>【1-3 教育課程への反映】</p> <p>◎地域看護研究研修センターを中心に学科の特色を生かした公開講座などの企画・実施</p> <p>1) 研修センター事業 実習指導研修会 1 回、公開講座 2 回、健康教室 2 回を計画し、大学院生募集は、集客を上げるため、指導者研修や公開講座等の看護職が参加する機会に盛り込むこととする。また、実施時は事前の予算計画書をもって実施にあたることとした。様々な機会を設け、学部・大学院の広報を行い、地域へのアピール、地域貢献につなげる。</p> <p>2) 新カリと旧カリとの円滑な移行(単位の読み替え)に努める。講義・演習に加え、特に臨時実習時間数の欠如が発生しないように実施確認を行う。</p> <p>エビデンス : 研修センター事業報告書</p> <p>【1-4 研究活動への反映】</p> <p>◎大学が進める研究への参画及び推進</p> <p>①大学が進める研究を遂行する ②科研応募率 100%をめざす ③科研費は継続も含めて採択率 30%以上をめざす ④学会発表・論文投稿・紀要投稿を積極的に行い、本学看護学科のアピールを行う。 ⑤学科紀要の投稿率を 3~4 編をめざす。</p> <p>エビデンス : 科研応募状況・採択率、紀要の投稿率</p> <p>【1-5 九州西部地域大学・短期大学連携事業】</p> <p>◎九州西部地域の大学・短期大学連携事業への積極的な参画・QSP(九州西部地域大学・短期大学連合産学官連携プラットフォーム事業)「ウォーキングで健康イノベーション」地域住民の疾病予防・健康増進事業「QSP 健康ウォーク 2025in 佐賀」へ参加し、看護学科ならではのブース運営を行う。 (エビデンス : 各事業の報告資料)</p> <p>・小城市との包括連携協定を踏まえ、包括連携会議の参加、学友会主催のスポーツ大会の拡大交流会の実施、小城市に着任した地域おこし協力隊との協働による事業の検討を行う。 (エビデンス : 小城市との包括連携会議資料)</p>	<p>(エビデンス : R7 年度第 24 回学科会議資料)。</p> <p>6) 大学院の周知・広報は実習指導研修・公開講座の際には挨拶時に学部・大学院紹介を行いパンフレットの提供を行い広報した。出張講義や進路ガイダンス、看護師募集に来学される病院へ学部・大学院紹介も欠かさなかった。</p> <p>1) 計画通り、地域看護研究研修センター主催の公開講座: 認知症予防・MCI 早期発見、ICT セミナー、ブレパレママ教室は地域の人々および養護教諭・看護介護専門職も参加され、教員の専門性を紹介することもできた。また、学生の主体的な参加活動は参加者のアンケートからも丁寧な指導に満足度も高かった。実習指研修に加え、3 月の就職説明会参加の病院へは学部・大学院の紹介とパンフレットを提供した。予算計画も外部講師は 1 人のみで、ようかん祭り・音楽フェスイベントへのハンドマッサージ・白衣試着による看護学部参加における経費・学生ボランティアへの補助も予算範囲内で実施できた。看護学部はハンドマッサージ体験・血圧測定のブースを出展では、学生の日ごろの練習成果を地域に還元するという双方向的な反映につながった。</p> <p>2) 新カリと旧カリとの移行については問題なく進行し、旧カリ最終学年の 4 年生の読み替えに伴うトラブルなく履修することができた。</p> <p>【1-4 研究活動への反映】</p> <p>①大学が進める研究への参画および推進では、SAGA つなぎ P への企画は教員 1 人が提案し 3 月末に発表する。 ②科研費の応募率は 100%には及ばず (76%)、継続も含めて採択率も目標には至らなかったが新規の採択はできた。 ③新規採択 3 件、継続課題と合わせると 5 件 (20%) であり、目標には届かなかった。目標値の再設定が必要である。 ④学会発表は各自、各領域で行い、他大学との共同研究も多く、論文投稿も延びている。 ⑤ 紀要投稿は昨年度より増え 5 編になった。学会発表等のポスター掲示を就職説明会時に掲示し、実習病院の看護職に大学院受験等へのアピールできた。科研費応募については課題が残るが、病院看護師への研究指導などは教員の研究力の推進にはなり、看護職へは大学院へ進学へのアピールできた。</p> <p>【1-5 九州西部地域大学・短期大学連携事業】</p> <p>QSP 健康ウォークにおいて看護学部はハンドマッサージ体験のブースを出展した。ウォーキング参加総数 331 名のうち 91 名の参加者へ 10 名のボランティア学生がハンドマッサージを実施し、多くの参加者から好評を得ることができた (エビデンス : R7 年度第 19 回学科会議資料)。</p> <p>今年度は初めて 9 月に小城商工会議所青年部が主催した「超アマチュア音楽祭 DX」において職業体験ブースを出展した。主に小城市内の延べ 257 名の家族連れが、赤ちゃんシミュレーターの心音聴取や子ども白衣試着を体験した。(エビデンス : R7 年度第 13 回学科会議報告)</p> <p>また、11 月の「日本一! ようかん祭り」では昨年度同様に学生食堂でハンドマッサージ体験・子ども白衣試着体験を実施した。ハンドマッサージ体験は 303 名の来場者が体験し、子ども白衣試着も 50 名の参加があった。パンフレット配布も行い、大学についての周知を行った。(エビデンス : R7 年度第 18 回</p>	<p>10</p> <p>7</p> <p>10</p>
--	--	---	------------------------------

	<p>・総合型選抜や指定校推薦などへ柔軟に対応し、志願者獲得を目指す。</p> <p>・看護学科の教員が協力し合い、学生主体のOCを企画する。委員から学部長・学科長へ報告と相談を行いながら、学科全体で学生の士気を上げるような取り組みを実施する</p> <p>・学生の主体性を促進するため、学生OCリーダーが柱となり、運営も学生が構築するなど、学生による学生のための企画を提案したい。教員は、アドバイザーとしてサポートする。</p> <p>OC内で、学生から学科を挙げての国家試験対策を伝える。</p> <p>・入学してから学生に広報の手段について印象に残った内容の確認をとる。</p> <p>・推薦入試合格対象者の学力分析（教務委員会との連携） （エビデンス：OC参加人数、参加者アンケート、実施学生アンケート、指定校一覧）</p> <p>◎大学院生を対象としたTA導入検討・活用による学修支援の充実</p> <p>①引き続き対象となる院生が入学した場合、実施を検討する。</p> <p>◎今後、センター長のもと、各部門ごとに計画を実施し、全学教員だけでなく、学生間でのサポートできる体制を作っていく。またセンターを中心に、学生だけでなく教職員に関するサポート支援や体制づくりを行い、具体的な活動とその評価を進めていく必要がある。</p> <p>エビデンス：ダイバーシティセンター体制に関する資料・合理的配慮対象学生に対する学習支援内容の資料</p> <p>【2-5 学修環境の整備】</p> <p>◎実習病院との連携</p> <p>・実習指導者と教員との連携</p> <p>・各実習の実習協議会を開催し、臨床指導者との実習目的・方法の共通理解を図る。</p> <p>（エビデンス：各実習協議会議事録）</p> <p>・必要に応じ、新規開拓を行う。</p>	<p>学科会議報告)</p> <p>さらに、1月にも昨年度同様に小城キャンパス学生会主催の小城市・西九州大学・小城高校・牛津高校の包括協定交流イベントスポーツ大会・ソフトバレーボールを開催した。それぞれ4～2チーム参加の編成で72名が参加した。今年度から地域おこし協力隊と協力し企画を進めた。小城市内の企業に協賛を依頼したところ、22社(約28万円相当)から協賛品を頂き、大会は大いに盛り上がりを見せた。アンケートでもスポーツ大会の継続を望む声が多く聞かれた。（エビデンス：R7年度第24回学科会議報告）</p> <p>①総合型選抜について、育成型、課題探求型、資格体験型で取り組んだが、志願者はI期のみ6名で、志願者獲得拡大の効果はあまりみられなかった。</p> <p>②指定校については、県内及び長崎県内の工業系高校及び農業高校などの実業高校等、全日制の全ての高校に枠を拡大したが、志願者は昨年30名に対し今年度は29名と1名減であった。さらに今年度は、一般I期での志願者増を狙い、看護学部限定の入学後の入学金免除の策を講じたが、広報の遅れもあり、昨年の37名から今年度は35名と2名減となり、効果は見られなかった。</p> <p>・推薦入試方式と学力に相関は見られなかったが、推薦入試者の退学・除籍率には相関があったため、入学後の指導に留意が必要である。</p> <p>・OCは、企画・運営を学生が行い、教員がアドバイザーとなる体制で実施した。OC参加者は、大学全体からみても昨年度より減少し、看護学科の参加者（小城キャンパス開催）も昨年度比58.5%（高校生79名および同伴者79名）と減少していた。減少の要因は様々あるが、第3回が延期になったことも大きな要因であり、延期前の看護学科申し込みが高校生55名および同伴者39名であり、延期後の参加が高校生21名および同伴者12名と減少していた。OC参加者の満足度は、学生の主体的な活動が好印象となり高かった。</p> <p>◎大学院生を対象としたTA導入検討・活用による学修支援の充実</p> <p>①看護学専攻修士課程院生3名（1年次2名2年次1名）はすべて社会人学生であることから、学修支援の活用には至らなかった。</p> <p>②ダイバーシティセンター長のもと、学科においては、チューター教員を中心とした学生相談を実施した。また、チューター教員が合理的配慮申請を行った学生・保証人と複数回の面談を経て情報を集約し、全学共通科目および各学科に関わる教員の学習支援を可能にした。学生間でのサポート体制は、チューター教員が行うゼミグループ活動、卒業研究ゼミグループ活動、実習グループ活動など、学生間でのサポートができる指導を行ったが、体制化までは至っていない。教職員に関するサポート支援は、現状維持で終始した。</p> <p>【2-5 学修環境の整備】</p> <p>1. 実習病院との連携</p> <p>各年次の実習科目において、実習前後に指導者会議を開催し、各施設の教育担当および実習指導者と、前年度の評価をもとに、本学の実習要綱から具体的な各科目の実習目標、そして実習学生のレディネスや傾向を情報共有した。</p> <p>実習指導においては、各科目と関連部署による協議会の定例化、本学の教育および学生のレディネスや特徴など情報共有する内容が確定してきたことに加え、本学卒業生の就職状況とつながり、実習施設との連携は強化できてきていると評価する。</p> <p>2. 実習施設の新規開拓</p>	<p>7</p> <p>10</p> <p>9</p> <p>10</p>
--	---	--	---------------------------------------

	<p>◎保健師課程履修学生に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新カリでの実習についての説明強化及び内容の充実を図る ・保健師国家試験合格率 100%に向けて新カリ講義での状況設定課題への対策強化 <p>◎教員採用試験日の早期化、養護教諭採用枠の減少から、教員採用選考試験 3年生チャレンジ受験を勧め受験の機会を増やし合格者の輩出を図る。そのため 2 年生から採用試験対策を実施していく。</p> <p>①教員が希望する時期にアンケートが入力できるよう引き続き全学 FD 委員会へなげかける</p> <p>②入力期間と授業終了時期が乖離している場合の対策を検討する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業終了時に学生に依頼するとともに、開始時期には入力状況を確認して、Teams や Outlook で依頼する。 ・回答率が低い 4 年次学生には 1 回/1 週間の登校日を設定し、まとめてアンケート入力する機会を設定する。 ・全学 FD と同じ内容のアンケートを適切と思われる時期に行い、入力が開始されたらデータを移行する。 <p>基準 3. 教育課程 ＜卒業認定、教育課程、学修成果＞ 【3-1 単位認定、卒業認定、修了認定】</p> <p>①新カリキュラム完成年次であり、新旧の移行が支障なくスムーズに行える。</p>	<p>本学学生の居住環境や大学に近く、そして科目の到達目標に合致する新規施設を次年度から実習できる施設を開拓した。大学の事業を通して、すでに実習している施設において新たな科目を受け入れる施設もあり、本学学生を積極的に実習の受け入れがあり、実習施設との関係性が密になっていると評価できる。</p> <p>1) 2026 年度 3 年次 4 施設 唐津赤十字病院（療養支援看護学実習 I（急性）、公立佐賀中央病院（療養支援看護学実習 I（急性）・II（慢性）、地域・在宅看護学実習）、佐賀県医療センター好生館（次世代育成看護学実習 I（母性）・II（小児））、松籟病院（地域保健福祉精神看護学実習）</p> <p>2) 2026 年度 4 年次看護学統合実習 3 施設 唐津赤十字病院、公立佐賀中央病院、松籟病院</p> <p>◎保健師課程履修学生に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新カリで初めて市町実習をこれまでの 2 単位から 3 単位として実施し、健康教育の実践も行った。学生にとっては保健師の実際を深く体験できるとともに、住民に実際に教育を行う体験を持つことで達成感のある内容となった。講義科目においても、学生が内容の講義とその内容に沿った国試問題の解説を行うなど、学生の主体的な学びに努めた。 ・国家試験対策として、年 3 回の模擬試験と強化講座を 5 回実施した。模擬試験の結果は上昇したが、本番では疫学統計に関する問題や事例内容が難化しており、合格率 100%の達成はならなかった。 ・4 年生 23 名のうち 3 名が行政保健師として就職するほか、卒業生のうち 2 名が佐賀県庁に合格し、2 名は県内町に就職するなど、地域保健の担い手養成の責務を果たしている。 ・実習の安定実施に向けて、嬉野市を新たに実習施設としてご承諾いただいた。 <p>◎教職課程履修生には前期後期の履修科目登録時に教職ガイダンスを行い、履修指導を徹底した。教員採用試験の早期化に伴い、教員採用試験対策も 3・4 年生を対象に 2 月より 23 回、6 月からは既卒生も参加できるようにオンラインも含めて土日に 4 回、計 27 回実施した。その結果、佐賀県教員採用試験大学 3 年生チャレンジ試験に 2 名が合格した。この試験における養護教諭の合格者 3 名中、2 名が本学であった。この成果が後輩にも刺激となり、2 年生の教職課程履修生からも採用試験対策への参加希望が寄せられ、2 年生からの採用試験対策の実施につながっている。</p> <p>エビデンス：教職課程自己点検・評価報告書</p> <p>①R7 より授業が終わるタイミングでアンケート入力ができるよう調整された。</p> <p>②①の実施のためには、教務課にあらかじめ相談する必要があり、その周知が徹底されていなかったため、後追いの実施となった。一部実施した科目もある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業終了時の入力機会の確保は実施されており、回答率も向上している。 <p>Teams や Outlook での依頼は実習などの入力期間と実習終了期間が乖離している場合に有効であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全学 FD と同じ内容のアンケートを適切な時期に行う方法は、①の実施に伴い行われていないが、全体的にアンケートの回答率は向上した。 <p>基準 3. 教育課程 ＜卒業認定、教育課程、学修成果＞ 【3-1 単位認定、卒業認定、修了認定】</p> <p>◎学科の教育目的をふまえたディプロマ・ポリシーの検討</p> <p>①実習も含め問題なく完了し、これで新旧カリの移行について</p>	<p>8</p> <p>10</p> <p>10</p> <p>8</p>
--	--	---	---------------------------------------

<p>②看護学科新カリキュラムの完成年次を迎えるため、新「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」の改正を踏まえた2度目のカリキュラム改正（3版）を作成し完了できる（適切な情報収集）。</p> <p>③成績低迷学生には、早期から保護者と連絡をとり、大学・家庭が連携した学修支援体制が取れるように努める。特に進級制限が撤廃されたことによる複数の未履修科目を持ったまま進級するケースが最小限になるよう、チューター教員とも協力して学修指導を行う。学校長推薦入学者のGPAは低く、また退学率が高い傾向がある。</p> <p>④卒業判定を厳正に行う。</p> <p>⑤保健師課程・養教課程の選抜を含む教育が滞りなく行える。</p> <p>⑥看護師国家試験合格率の維持・向上（目標 100%、最低新卒 95%以上）、保健師国家試験合格率の向上（目標 100%）、に向け、国試対策委員中心に、全教員で学修支援に取り組む。</p> <p>⑦退学者、休学者が前年度よりも低下する。</p> <p>⑧推薦入試合格対象者の学力分析（入試広報との連携）</p> <p>【国家試験対策】</p> <p>1) まずは教員主導でもよいので「一致団結して合格しよう！」という気運を盛り上げる。</p> <p>2) 個別または小グループ学修でスタートする（当面2日/週）。国試委員だけではなく、全教員で指導に当たる。特にチューター教員との連携を強化する。</p> <p>3) 学修習慣・学修方法の確立に向けた指導。特に問題解説からの発展学修方法を指導する。また、学生と教員での模試結果の振り返りとやり直しの徹底に努める。</p> <p>4) 月一回ベースの模試の実施により、学修成果の確認と指導を行う。</p> <p>5) 業者及び外部講師による特別講義の実施継続する。</p> <p>6) 学修会に來ない、自己効力感の低い学生などの情緒面の支援。必要時保護者と連絡を取り、心理的支援を依頼する。</p>	<p>は完了した。</p> <p>②進級制限が撤廃され、それに伴う学生指導（保護者対応）について継続し、必要時保護者を交えた面談を実施した。</p> <p>③昨年度より、成績低迷者の保護者への連絡について運用を開始し、チューターと保護者との直接的な対話の機会が増え、大学⇄家庭での情報交換が増え、問題発生時の対応がスムーズとなった ④卒業判定は、対象学生全員の単位認定一覧を確認し、厳正に行い、原級留置であった者を含め、106名が認定された。</p> <p>⑤看護学部の進級制限廃止に伴い養護実習要件も変更が必要となり、選抜基準を養護実習要件に合わせ「免許要件科目のGPAが2.2以上」と改定した。適用となった。今年度の学生には選抜試験の説明会にて周知徹底を図った。選抜試験や教職科目の履修については、履修登録時に教職ガイダンスを実施し指導を行った。</p> <p>また、保健師課程は、今年度から2年修了時の選抜要件を総合GPAが2.7以上として、25名が3年次の課程へ進級し、安定した成績を保っている。また、4年生は23名が課程履修し、そのうち2名が行政保健師、2名が病院保健師としての就職し、地域保健の担い手を輩出することができた。</p> <p>看護学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂があり、教務委員会委員が中心になって検討を行った。ただし、リハ学部との統合を控え、その検討が次年度行われることになり、今年度はAP, CP, DPの見直し（大学全体で実施）、新規科目と削除科目の確認、新コアカリと新カリキュラムとの整合性の確認までとなった。</p> <p>⑥目標合格率を目指していくために、学部全教員に、国試対策への理解と協力を求め、意識の向上に努めた。そのため、今年度は、教員による国試対策補講依頼と合わせて、昨年までは国試対策委員だけで実施していた早起き勉強会の担当を全教員へ依頼し、計画を立てていった。しかしながら、国試対策委員以外の教員が率先して早起き勉強会を担当するという意識は低く、ほとんどの日程を国試対策委員で実施することとなった。</p> <p>4年生の国試対策における補講については、前期は5月～7月は看護管理実習、就職活動などがあり、全学性を対象とした実施が難しく、結局8月からの開始となった。今後は、4月から開始できるような検討も必要である。</p> <p>看護師国家試験受験者数 106名（現役） 看護師国家試験合格者数 91名（現役） 看護師国家試験合格率 85.9%</p> <p>⑦退学者6名、休学者4名、復学者1名、除籍1名、転学部0名であった。退学者の増加は、これまでの休学者の学籍移行に伴うものであった。休学者は体調によるものが2名、妊娠出産2名であり、そのうち1名が次年度復学予定である。</p> <p>⑧推薦入試方式と学力に相関は見られなかったが、推薦入試者の退学・除籍率には相関があったため、入学後の指導に留意が必要である。</p> <p>【国家試験対策】</p> <p>1) 2) 学部全教員に、国試対策への理解と協力を求め、意識の向上に努めた。4年生については、前期4月からホームルームの時間を時間割に設定し、全教員にも参加を促した。ホームルームでは国試対策に対するアナウンスや学修方法・学修計画などの指導を実施したが、5月初旬から看護統合実習が開始となり、5月以降は、学生全員集合できる時期を確保するのが難しく、5月で終了となり継続できず、全教員の参加もみられなかった。</p> <p>3) 4) 5) 過去3年間の卒業生の国試対策に関するアンケート（自由記述）をもとに分析したところ、「模試のやり直し」という言葉が特徴的な語句として抽出できたこの点も踏まえ、今年度は過去問の学修と合わせ、これまで受けてきた模試のやり直しも行っていくように周知し、また、外部教員、業者補講担</p>	<p>5</p> <p>5</p>
---	---	-------------------

<p>7) 不合格であった学生の支援(学修継続状況や勤務状況の把握、模試案内、教材紹介、受験手続)をする。</p> <p>8) 2年生からの低年齢模試を行う</p>	<p>3-2 教育課程及び教授方法】</p> <p>①教育の質の向上をめざした、看護学科主催の研修会などを開催し、教授方法の向上に努める(学科独自研修会1回/年)。</p> <p>②日本看護系大学協議会などの研修会情報を随時提供し、参加を促す。</p> <p>③R7年度は新カリの完成年次を迎えるため、2度目のカリキュラム改正を行う。新看護学教育コアカリキュラムの改正を踏まえて検討し、それに伴い三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検を行う。</p>	<p>当者にも、これまで受験してきた模試の問題と解説を提示して、依頼を行った。また、今年度は、委員会で模試の正答率分析を行ない、看護学部での弱点科目も各領域から抽出し、その科目を中心に外部教員へ補講依頼を行った。また、講義で触れていなかった婦人科疾患(乳腺外科)、子宮頸がんなどの科目について、産婦人科担当医への講義依頼も行った。</p> <p>今年度は、合計7回の業者模試と前年度の模試を1回、合計8回の模試を実施した。</p> <p>6) 今年度は、学修会や補講への出席状況が悪く、約40%の欠席率が目立った。また、模試の欠席率も約30%前後と高かった。欠席学生については、担当チューターへ指導を依頼していたが、連絡が取れない、所在が分からないなどの学生も散見され、チューター介入指導の遅さが目立った。</p> <p>8) 今年度は2年生から低学年模試を実施できた。また、3年生については、実習開始前に実施した低学年模試を実習終了後にも実施し、合計2回実施できた。3年生については、2回目の模試の結果で正答率が高い学生が多く、1回目の模試の復習をしっかりとできている学生が多かった現状であった。</p> <p>【3-2 教育課程及び教授方法】</p> <p>①学科独自の研修会は開催できなかつた。教育の質の向上を目指して、教員相互の授業参観のしくみを確立した。教員相互の授業および実習指導の参観を通して、授業の進め方や指導技術方法を学び、自己の教育で生かすことによりよい授業づくりを推進する目的であり、質の向上につながる取り組みである。</p> <p>②若手(新入)教員には日本私立看護系大学協会が主催する新任教育向け研修会参加を促し2名参加した。新カリキュラムに関する研修は必須として何度も機会を設けるなど積極的に参加を促した。その他にもハラスメントに関する意識向上に向けて研修の案内を促すとともに参加率も確認し評価した。</p> <p>③看護学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂があり、教務委員会委員が中心になって検討を行った。ただし、リハ学部との統合を控え、その検討が次年度行われることになり、今年度はAP, CP, DPの見直し(大学全体で実施)、新規科目と削除科目の確認、新コアカリと新カリキュラムとの整合性の確認までとなった。</p>	<p>10</p>
		<p>当該委員会 達成度集計</p>	<p>129/150</p>
		<p>達成度平均点</p>	<p>86/100</p>

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	達成度
デジタル社会 共創学環 (学環長)	<p>①教育コンテンツの充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップ実施のための調査・計画をおこなう。 ・留学を円滑に実施するための調査・計画をおこなう。 ・各種資格取得を可能とするための調査・計画をおこなう。 	<p>①教育コンテンツの充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップを円滑に実施するため、PBL授業に複数の県内企業を招聘し、企業研究の機会をつくることができた。インターンシップの中間支援組織との連携も構築することができた。 ・留学に関しては従来の派遣事業との連携を図ることを計画している。タイへの短期留学も企業と連携して実現することができた。 ・IT系の資格取得に関する学生向け案内を実施した。 	9
	<p>②キャンパスライフの充実</p> <p>学環学生に日常的な学習習慣を獲得させる。また、日常的な居場所も確保する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ダイバーシティ・センターと協働し、アルバイト、日常生活など、留学生に対する生活支援を充実させる。 ・学環が一体となれるようなイベントを企画実施する。 	<p>②キャンパスライフの充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・留学生に対する支援は、日本語講座、日本での生活に関する指導等、積極的に実施した。しかし、留学生の主体性を涵養できず、出席率が芳しくない学生も散見された。 ・多数のイベントに学環学生を誘導することはできたが、参加学生が一部の学生に集中し、学環の一体化に関しては不十分な結果となった。 	7
	<p>③募集広報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学環の広報につながる多様なイベントを実施していく。 ・総合型入試にバリエーションをもたせ、早期(6~8月育成期間、9月出願)からの育成型入試を強化実施する。 ・高大連携事業(ポルタ等)への積極的に参加する。 ・SNS等を活用した広報活動を展開する。 	<p>③募集広報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学環、新学部の広報につながるe-sportsイベントを多数開催することができた。 ・総合型入試に関しては応募者が減少し十分な成果を上げることができなかった。 ・ポルタを実施したが、参加者が少数であり、十分な効果をあげることができなかった。 ・イベントや授業の様子などインスタグラムを用いた広報活動を実施できた。 ・定員を達成することができた。 	8
		当該委員会 達成度集計	24/30
		達成度平均点	80/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び 担当	令和7年度検討 および実施事項	令和7年度総括	達成度
教務委員会 (委員長)	○学修支援 ・教員と職員の連携により、各種資格取得に係る履修方法などのガイダンスを充実させる。 ・ダイバーシティセンターと連携して、障がいのある学生や留学生への支援を進める。	・資格試験に係るガイダンスを複数回実施し、既卒者に対しても個別に対応した。 ・ダイバーシティセンターならびに学生支援課と連携しながら非常勤講師へ配慮希望学生の情報提供を迅速に行った。また、配慮希望学生への要望に応じて支援を進めた。	10
	○学修環境の整備 ・学部長会議の決定に沿って教室等の整備を行う。	・老朽化に伴い不具合が発生していたプロジェクターの交換を行い、学修環境の整備を行った。	10
	○学生の意見・要望への対応 ・IR コンソーシアムによる調査の結果から次年度に向けた計画を立てる。	・Web上でIR コンソーシアムアンケートを行ったため回収率が80%に届かなかった。またアンケート実施初年度であるためデータの蓄積ができておらず、計画の策定までには至っていない。	7
	・IR コンソーシアム調査に個別の質問項目を立て、調査を行う	・IR コンソーシアム調査に学生生活実態調査に関する個別質問を追加し調査を行った。	9
	◎教育課程及び教授方法 ・デジタル社会共創学環の副専攻プログラムを実施する。	・デジタル社会共創学環の副専攻プログラム制度を実施したが希望者はいなかった。	7
	・IR コンソーシアム調査を分析し、主体的学修の向上を図る。	・IR コンソーシアム調査を実施したが分析までには至っていない。	7
	◎学修成果の点検・評価 ・自己の成長の視覚化が可能となるディプロマ・サプリメントの作成が行える体制を整え、実行する。	・新しいディプロマ・サプリメントの入力システムを構築し、面談時に教職員及び学生の双方が学修成果を点検・評価しやすい体制を整えた。	10
	○教学マネジメントの機能性 ・教学マネジメントの基本方針を作成する。	・「教学マネジメントの確立」を作成した。	10
	・3つのポリシーの改訂及びブルーブリックの改訂等を行う。	・3つのポリシーの改訂及びブルーブリックの改訂を行った。	10
	・日本語科目を実施する	・外国人留学生の日本語力向上のために卒業要件として新たに日本語科目を設けた。	10
		当該委員会 達成度集計	90/100
		達成度平均点	90/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括と

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び 担当	令和7年度検討 および実施事項	令和7年度総括	達成度
共通教育 運営委員会 (委員長)	◎高大接続科目の円滑な実施に向けて体制を整備し、実施する。	・新たに協定書を締結した連携校にも受講案内を行って受講者の増加を促し、円滑な運営を行った。	10
	◎共通教育科目「あすなろう」及びデータサイエンス科目(入門・演習)を円滑に実施する。	・「あすなろう」及びデータサイエンス科目(入門・演習)を円滑に実施した。	10
	◎学科の枠をはずしたクラス編成での受講について調査を続ける。	・共通教育全般に係るアンケートを実施し、満足度調査を行ったが肯定的な意見が多くみられた。	10
	◎1年次の学生数の増大に伴い、時間割を変更する。	・共通教育の対面実施についてアンケートを実施し、環境整備のための調査を行った。	10
		当該委員会 達成度集計	40/40
		達成度平均点	100/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び 担当	令和7年度検討 および実施事項	令和7年度総括	達成度
教職課程 委員会 (委員長)	○教職履修カルテの改善を検討する。	・履修科目の追加や改善点の有無について検討を行った。	10
	○市町村教育委員会および県教育委員会との連携を継続する。	・佐賀市教育委員会、神崎市教育委員会と教育実習会議を開催した。また、佐賀県教育委員会との連携・協議会も開催して意見交換を行い、さらなる連携強化を図った。	10
		当該委員会 達成度集計	20/20
		達成度平均点	100/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	達成度
学生支援委員会 (学生支援部長)	◎学生生活・修学支援 ・令和7年度から実施される多子世帯支援拡充(多子世帯の学生等に対し、所得制限なく、一定の額まで、大学等の授業料及び入学金を無償とする措置)について新入・在学生へ説明をおこない、滞りなく申請・採用につなげる。 ・JASSO奨学金(給付と貸与)採用学生において、出席率や成績不振により適格認定で警告を受ける学生情報を教員と共有し、教員からの指導を促進し、退学や除籍へつながらないように努める。	・令和7年度の各種奨学金の受給者情報(多子世帯支援拡充を含む)を各学科と共有し、新入生・在学生への説明を行った。また、前期の出席率や成績不振により警告を受けた学生の情報を対象学科の教員と共有し、奨学金の支給廃止が学生の除籍につながるような支援を行った。	9
	◎ダイバーシティセンターとの協力 ・ピアサポート制度導入や障がい学生支援について連携し、配慮が必要な学生情報の共有と、求められる必要な支援を検討・対応していく。 ・新入学留学生(大学55名、短大80名)の受入れ業務をおこなう。 ・UPIテスト実施、テストデータを学生相談室(CS)と共有し、配慮が必要な学生の実態把握、その学生への支援を協力して行う。	・ピアサポート制度の拡充や障がい学生への生活・学習支援の連携、学習に対する合理的配慮の啓発などを、システムティックに行うために、ダイバーシティセンターと協力して支援を行った。また、そのためのマニュアルを作成され、当大学のホームページ上で、ダイバーシティセンターの取り組みと合理的配慮の実践がアピールされた。また、FD研修会において教職員の支援の必要性が啓発された。(学生支援課教職員とダイバーシティ担当教職員は兼務として活動した) ・前・後期ガイダンス時にwebでUPIテストを実施し、前期90%、後期78%と高い回答率となった。学生相談室へ情報を提供し、学生の実態調査を行い、支援が必要な学生の抽出と必要な支援に協力した。	9
	◎学友会関連 ・学友会と学生支援課で協力し、サークル等の支援、役割や取り組みについて検討していく。 ・学友会と学園祭実行委員がうまく連携し、活発な学園祭となるようにサポートしていく。	・学友会と協力し、各サークルの支援、役割や取り組みについて検討した。 ・学友会と学園祭実行委員、学生支援課が連携し、活発な学園祭となるようにサポートを行った。	9
	◎学生食堂 利用者を増やすため、西九大サポートと協力して改善に努める。	食堂や学生ホールの破損したイスの入れ替えや壁紙の剥がれの修繕などを行い、環境整備に努めた。共通教育科目開講日の神埼キャンパスでの弁当販売に際し、成分表の作成及び販売サポートを行った。	8
	◎学生就職支援 ・佐賀県内就職を促進するため、佐賀県内の求人開拓と、佐賀県内の求人情報を定期的に学生へ配信していく。 ・定期的なインターンシップ情報の発信をおこない、特に九州インターンシップ推進協議会のインターンシップにおいては例年を超える人数の参加を目指す。	・佐賀県および周辺地域の求人情報を中心に、ポータルサイトおよびメールで各学科に定期的に配信し、佐賀県内への就職増加に取り組んだ。大学に届いた求人情報を提供し、就職内定率向上に尽力した。また、定期的にインターンシップ情報の発信をおこなった。	8
◎アンケート調査 ・後期ガイダンス時に学生生活実態調査を行い、調査レポートを作成し、全学教授会等で報告を行う。また、学生向けレポートを作成し、学生ポータルサイト等で共有する。なお、学生向けレポートの掲載内容は、学生支援委員会の中で検討する。 ・2026年2月に4年生を対象に卒業時満足度調査を行い、3月開催予定の「学長と卒業予定者との懇談会」で調査結果を共有し、次年度以降の改善に努める。	・後期のガイダンス時に、教務課との協力により、大学IRコンソール調査内容に、学生支援課独自の内容を追加して調査を行った。学生支援関連の調査結果についてレポートを作成し、全学教授会にて報告・共有した。また、後援委員会及び総会において、前年度アンケートの結果を報告した。 ・卒業時満足度調査を2026年2月に実施し、2026年3月3日(火)に開催した「学長と卒業予定者との懇談会」で調査結果を上層部へ共有し、聞き取りの材料とした。	9	

	<p>◎AI チャットボット</p> <p>利用状況の分析を行い、教務課、入試広報課、学生支援課等においてQ&Aの充実を図る。</p>	<p>利用状況は、月平均アクセス数が362件であり、平均回答率は78.8%と高く、アクセス時間帯は9～18時が70%、18～9時が30%であった。窓口対応の負担軽減及び夜間の問い合わせへの対応として十分機能していると思われる。</p>	8
		当該委員会 達成度集計	60/70
		達成度平均点	86/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	達成度
入試広報委員会 (委員長)	◎入学定員に沿った適切な学生受入れ数の維持	◎入学定員に沿った適切な学生受入れ数の維持	5
	<p>【到達数値目標】</p> <p>① 入学者数：540名 ② 志願者数：950名 ③ OC参加者数：全体2,000名 (うち生徒数1,200名)</p>	<p>【数値目標に対する結果】</p> <p>① 入学見込者数：480名(3/5現在) ② 志願者数：712名(3/5現在) ③ OC参加者数(秋OC含む) 延べ1,206名(うち生徒数619名)</p> <p>《R6同日比》 入学見込者数：490名(3/6現在) 志願者数748名(3/6現在) OC・学校見学参加者数 延べ1,341名(うち生徒数787名)</p>	
	◎ 【戦略的な募集広報活動の推進】	◎ 【募集広報の範囲、対象、方法の再構築】 今年度も早い段階での募集広報活動を各学科の協力を得て展開することができた。 具体的には、高校教員対象説明会を5/15(木)に開催、またエリア毎に担当者を振り分けた。一斉高校訪問においてはOC開催の1か月前の6月上旬から展開し、早期の学生募集活動を実施することができた。 また、DXセンターによるSNS等での広報については昨年度より大いに発信することができた。	8
・定員充足を目的とした入試制度の検討(継続)	・今年度も年内入試に重点を置き、年内合格者対象の奨学金制度の設置や総合型選抜入試での3つパターンの趣旨を分かりやすく設定したが、例年より3割程度志願者が減少した。ただ、外国人留学生オンライン型入試においては、全学部において早期に募集広報活動ができ、3割アップの志願者を獲得することができた。年明け入試では看護入学支援金を設置し、看護一般入試志願者および入学者増を図った。	7	
		当該委員会 達成度集計	20/30
		達成度平均点	67/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び 担当	令和7年度検討 および実施事項	令和7年度総括	達成度
図書館 (委員長)	<p>◎ 図書館機能の充実 【到達目標】</p> <p>① 電子化の進展と学術情報および流通の変化への対応 (継続)</p> <p>② 学習支援及び教育研究活動への支援 (継続)</p> <p>③ 各学科・学環の図書委員との相互連絡を昨年度まで以上に密にすることにより、大学全体の予算執行状況に応じた効率的な予算執行とする (継続)</p> <p>④ 神埼キャンパスおよび佐賀キャンパスの蔵書整理をより迅速にすることにより、3キャンパスにおける蔵書収容能力を確保する。特に健康データ科学部が設置されるキャンパスの図書館においての収蔵収容能力の補強については緊急(申告・重要)な課題として捉え検討する。</p> <p>⑤ 令和7年度より3キャンパス図書館の全てが西九大サポートからの業務管理体制となることより、図書館における基本業務の統一化を図るとともに、将来構想としてのスタッフの相互補完体制の構築を目指す。</p>	<p>① 令和7年度福岡県・佐賀県大学図書館協議会南部地区研修会にて「オープンアクセス・オープンサイエンス等への取組み」を研究テーマに取り上げ、各大学図書館との情報交換を行った。本施策は、国の施策として執り行われるものでもあることから今後も情報共有を密に取り組んでいくとの認識で一致している。</p> <p>② 新入生および在校生に向けての利用指導、文献検索の指導等を行うと同時に、本年度から学生用プリンターを各図書館に配置することが決定したため、個人PCの取り扱い、プリンターへの出力等についても学生からの数多くの問い合わせを受けることになった。経費等を含めて苦戦しながらも対応した。</p> <p>③ 各学科・学環図書委員へ四半期毎の予算執行の状況を報告し、予算の計画的な執行を促した。また、3月開催の図書委員会にて図書館の夜間開館の時間短縮、土曜開館日の短縮について審議として諮り、各学科・学環の図書委員からは今後の方向性として了承を得た。</p> <p>④ 佐賀キャンパス図書館では令和9年度に健康データ科学部が開設されるため、図書・雑誌の除却にて収容能力の確保に努めた。令和7年度における除却冊数については以下のとおり。 大学：3,430冊、短大部：2,959冊</p> <p>⑤ 本年度より3キャンパス図書館の全館は西九大サポートでの運営体制へと切り替わった。開設当初に不足したスタッフについては採用からOJTに至るまで事細かく教育を施し、外部委託による経費等の削減に成功した。</p>	<p>8/</p> <p>9/</p> <p>7/</p> <p>7/</p> <p>10/</p>
		当該委員会 達成度集計	41/50
		達成度平均点	82/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、() 内は責任者 ◎印は優先事項 達成度は x/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	達成度
リカレント教育・研究推進本部 (本部長)	◎引き続き、推進本部と3センター長・室の会議を定期的に行い、研究の推進のための課題について協議を行い、研究活動の推進にあたる。今年度も、全教員に対して研究推進のスケジュールを知らせ、科研の説明会の開催と、新規で科研添削を専門業者に依頼する。 ・私立大学等改革総合支援事業(タイプ3 地域連携)に採択にむけて努力する。 ・本学全教員の「研究シーズ集 2025」の作成に取り組むが、出版の形態は検討する。引き続き、産学官連携による共同研究を推進させる。 ・引き続きコンソーシアム佐賀に参加し、本学としての社会的役割を果たす。	・推進本部長と3センター長会議は、2回の実施に止まったが、科研説明会、添削の依頼は確実に実施することができた。 ・私立大学等改革総合支援事業(タイプ3 地域連携)の採択にむけて努力したものの、採択には至らなかった ・本学全教員の研究シーズを集約した「研究シーズ集 2025」を冊子体で作成し、TSUNAGI コンベンションにて配布し、本学の研究内容を広く周知した。 ・コンソーシアム佐賀に参加し、リレー講座を実施した。	7
	◎健康福祉・生涯学習センターは、公開講座の数の拡大を目指して取り組む。 ・引き続き、コンソーシアム佐賀の大学・短期大学と連携して、共同Webサイト sagallege の運営に協力する。	◎健康福祉・生涯学習センターでは「エルダーカレッジ(週1:2年課程)」「生きがいづくり教室(毎週水曜日開催)」「公開講座(分野別に教員が講義)」を大学・短期大学と連携しながら継続開催できた。	10
	◎健康支援センターでは、1) 新しい健康支援センター規程に基づき、運営の充実をはかるため、HP リニューアルを完成させる。運営業務に関するマニュアル作成に着手し、2年後の完成を目指す。2) 生活習慣病予防・改善のための運動教室を継続する。3) 女性アスリート医科学支援事業における新たな展開として、①佐賀県医師会や佐賀県健康づくり財団と連携してアスリート個別健診の開発・普及に取り組み、②ジュニア選手・保護者・指導者を対象として健康管理に関する研修会・個別相談会を開催する。	◎健康支援センターでは、1) 運営委員会を年3回開催し、HP リニューアルを完成したほか、マニュアルの第一弾として利用者向けマニュアルを完成させた。学内利用件数が増加した(前年比18件増) 2) 生活習慣病予防・改善のための運動教室を継続し、のべ238名(前年比21名増)が参加した。3) 女性アスリート医科学支援事業はモデル事業3年目となり、新たな取り組みとして①佐賀県医師会や佐賀県健康づくり財団と連携して、中高生選手が性別を問わず地域の医療機関で健診を受けられる仕組みを完成し、のべ362名が健診に参加した。②選手・保護者・指導者を対象とした研修会・個別相談会を毎月一回健康支援センターにおいて開催し、のべ109名が参加した。	10
	◎産学官連携事業として、引き続き、本学と佐賀県との連携を継続し、TSUNAGI プロジェクト(大学連携推進事業)に取り組む。さらに、その他の共同研究(外部補助金)の採択件数を増大させ、産学官連携の推進をはかる。	◎TSUNAGI プロジェクトにおいては、今年度2件が採択され、本学と佐賀県との連携強化を図ることができた。加えて、その他の共同研究(外部補助金)の採択件数も増加し、産学官連携の一層の推進につながった。	10
		当該委員会 達成度集計	37/40
		達成度平均点	93/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、() 内は責任者 ◎印は優先事項 達成度は x/10

区分及び 担当	令和7年度検討 および実施事項	令和7年度総括	達成度
国際交流 センター (委員長)	<p>◎学部学科・大学院の各特色を実践する教育機関としてのブランドの確立</p> <p>●国内外オンライン講座の開設など、国際化に向けた日本人学生の海外留学派遣及び海外からの留学生受け入れの両輪を促進していくことができ、佐賀という地方にしながら、本学では国際的発信でき、国際交流に興味がある新たな日本人学生層の獲得に繋げる(継続)。</p> <p>この具体的なアプローチは次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> 海外協定校や留学生受入エージェントと緊密に連携し情報発信を粘り強く推進することで、各国・地域における本学の認知度を高め、更なる留学生の獲得につなげる。同時に、アジア若者健康福祉まちづくりプロジェクト等の開催や、台湾の協定校やオーストラリアのパートナー校との連携強化によるグローバル教育プログラムを推進することで、「海外留学」や「語学学習」に関心を持つ日本人学生の本学進学を促す。 	<p>◎学部学科・大学院の各特色を実践する教育機関としてのブランドの確立</p> <p>●国内外オンライン講座の開設など、国際化に向けた日本人学生の海外留学派遣及び海外からの留学生受け入れの両輪を促進していくことで、佐賀という地方にしながら、本学では国際的学びができるというイメージを発信でき、国際交流に興味がある新たな日本人学生層の獲得に繋げる(継続)。</p> <ul style="list-style-type: none"> 香港のエージェント「SHIN Japanese Learning Center」が主催したオンライン日本留学説明会に事務方3名で参加し、劉コーディネーターを中心に中国語での積極的な情報発信を行った。その結果、次年度に短大部食健康コースへの留学生2名の受入が決まり、具体的な成果につながった。 国立台北大学との協定締結の橋渡し役である詹智民氏の協力により、日本留学に関心を持つ台湾現地高校との新たな関係構築が実現し、台湾地域における本学の認知向上につながった。 オーストラリアのパートナー校との連携を継続的に活用し、今年度も5度目となる夏期休暇派遣を実施した。さらに、春季休暇には子ども学科の学生1名が同校に自費の短期留学を計画しており、引き続き「海外留学」や「語学学習」に関心を持つ日本人学生の育成が進んでいる。 「アジア若者健康福祉まちづくりプロジェクト」については、企画立案者である責任者がセンターを離れたため、今年度は実施を見送った。 	10
	<p>◎九州西部地域大学・短期大学連携事業への参画</p> <p>●本学の留学生と協力して佐賀県立佐賀商業高等学校と実施している「高大連携事業」を本学が協定を結ぶ高校に拡大し、国際交流に興味がある日本人学生層の獲得に繋げる。また県内外の各種国際イベントに外国人留学生と日本人学生とが共に参加参画する機会を増やす(継続)。</p> <p>この具体的なアプローチは次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ダイバーシティセンターと協力しながら、プログラムのさらなる充実を図るとともに、これまで実施してきた学校での継続開催に加え、県内の他の小・中・高等学校でも実施できるよう、引き続き働きかけていく。 ダイバーシティセンターと連携し、主にこれまで参加実績のある県内外の各種イベントに留学生の積極的な参加を促すことで、日本人学生をはじめとする地域住民との交流の場を広げていく。 	<p>◎九州西部地域大学・短期大学連携事業への参画</p> <p>●本学の留学生と協力して佐賀県立佐賀商業高等学校と実施している「高大連携事業」を本学が協定を結ぶ高校に拡大し、国際交流に興味がある日本人学生層の獲得に繋げる。また県内外の各種国際イベントに外国人留学生と日本人学生とが共に参加参画する機会を増やす(継続)。</p> <ul style="list-style-type: none"> QSP および高大連携の枠組みの一環として、佐賀清和高等学校および佐賀商業高等学校の学生に対し、本学留学生との異文化交流の機会を提供した。これにより、国際交流に関心を持つ日本人学生に対して本学の魅力を効果的に発信することができた。 「城下栄の国まつり」、「鹿島ガタリンピック」、「SPIRA さが国際フェスタ」、「水鏡プロジェクト」、「佐賀さいこう国際運動会」等、地域性の高いイベントに留学生と教職員が参加することで、地域住民との交流の場を広げることができた。また、今年度初開催となった佐賀県主催の「サガシルグローバル」にも留学生とセンター教職員が参加し、県内就職を希望する留学生の意欲向上に寄与した。 	10

<p>◎従来の手法にとらわれない積極的な ICT 活用を通じ、留学生募集から卒業後の就職までを見越した国際交流センターとしての国際的協働教育プログラムを確立する。</p> <p>●毎年度、大学（大学院含む）へ最低20名以上、短期大学部へ最低40名以上の新規留学生の「効果的」且つ「安定した」受け入れを目指す（継続）。</p> <p>この具体的なアプローチは次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もとより海外留学生の「定員確保」と「質的保証」に尽力する。 ・特定の国・地域には一定のカントリーリスクがあるため、「リスクヘッジ」と「多様性の拡大」の観点を踏まえ、主に香港、台湾、ベトナムの協定校と留学生受入エージェントと連携し、オンラインと対面を組み合わせた留学生募集を進める。また、来日前の入国管理局での手続きに要する時間や労力を考慮し、入試広報課や留学生受入エージェントと緊密に連携しながら、書類確認を迅速に行う体制を整える。 ・とくに「留学生200名時代」を迎えた現在、昨年佐賀CPでのダイバーシティセンターの創設に次いで、神埼CPでも同センターの創設（機構改革と職員増）が必要不可欠である。 ・ダイバーシティセンターと連携し、Teams や ChatGPT などのツールを引き続き積極的に活用しながら、各種支援を推進する。特に、留学生の就職支援を強化することで、更なる留学生の獲得につなげるとともに、生活支援や地域活性化に貢献できる人材の育成を促し、持続的な好循環を生み出していく。 	<p>◎従来の手法にとらわれない積極的な ICT 活用を通じ、留学生募集から卒業後の就職までを見越した国際交流センターとしての国際的協働教育プログラムを確立する。</p> <p>●毎年度、大学（大学院含む）へ最低20名以上、短期大学部へ最低40名以上の新規留学生の「効果的」且つ「安定した」受け入れを目指す（継続）。</p> <p>この具体的なアプローチは次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主要なエージェントとの緊密な連携を通して昨年度に引き続き、大学と短大が2年連続、目標の新規受け入れ人数を達成することができた。 <p>※以下、今年度5/1現在の人数</p> <p>正規留学生 合計250名（内、137名新規） <受入内訳> 大学院・・・計9名（内、2名新規） 学部・・・計77名（内、52名新規） 短大・・・計164名（内、83名新規）</p> <p>非正規生 合計18名 （内、9名新規） <受入内訳> 大学院研究生・・・計1名（内、0名新規） 学部研究生・・・計8名（内、2名新規） 交換留学生・・・計9名（内、7名新規）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Teams、Forms、ChatGPT等の生成AIツールを活用し、留学生の就職支援をはじめとする各種情報を日英併記で効果的に発信することができた。また、上記ツールを活用した留学生の在留資格情報管理に関する業務を円滑に実施できたことで、大学・短大ともに福岡出入国在留管理局の審査において、3年連続で「適正校（クラスI）」に選定される成果につながった。 ・留学生就職支援事業で連携するアールアドバンス社との協働に加え、留学生採用を希望する事業所からの照会について、ダイバーシティセンターが窓口となって適切に調整した。これらの取り組みにより、多くの留学生が内定を獲得する結果につながり、就職支援機能の強化に寄与した。 <p>※短大地域生活支援学科食健康コース・多文化コース卒業予定者で就職希望者42名中、ダイバーシティセンターのコーディネートにより内定承諾者17名</p>	<p>10</p>
<p>◎本学で学ぶ外国人留学生とも連携し、ポストコロナ禍での新たな留学形態として、「オンライン留学と現地留学を組み合わせたブレンデッド・ラーニング型国際交流プログラム」を開発する（継続）。</p> <p>●毎年度、大学は最低100名以上、短期大学部は最低15名以上の日本人学生の海外派遣を目指す。</p> <p>この具体的なアプローチは次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍以降も着実に学生派遣実績を伸ばしているオーストラリアと韓国のプログラムに加え、学環とも連携し、オンラインと現地型を組み合わせたPBL（Project-Based Learning）形式の学習プログラムの導入を検討する 	<p>◎本学で学ぶ外国人留学生とも連携し、ポストコロナ禍での新たな留学形態として、「オンライン留学と現地留学を組み合わせたブレンデッド・ラーニング型国際交流プログラム」を開発する（継続）。</p> <p>●毎年度、大学は最低100名以上、短期大学部は最低15名以上の日本人学生の海外派遣を目指す。</p> <p>この具体的なアプローチは次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・引き続き円安および世界的なインフレにより海外渡航費が高騰していることが、日本人学生の海外留学に対する最大の障壁となり、大学・短大ともに派遣人数は目標を下回った。しかし、昨年度に引き続き海外派遣促進を目的とした費用補助制度を大学・短大の双方に適用した結果、短大部においてはコロナ禍以降で単年度の派遣人数が最大を更新することができた。 ・学環と連携した新たなプロ学習プログラム導入は未着手に終わった。 	<p>7</p>

		<派遣内訳> 学部・・・計15名 短大・・・計6名 ※学生支援課に届が出されたプログラムの中から、前年度 JASSO 日本人学生留学状況調査の基準に沿って計上	
		当該委員会 達成度集計	37/40
		達成度平均点	93/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、() 内は責任者 ◎印は優先事項 達成度は x/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	達成度
DX推進センター (委員長)	<p>【引継ぎと円滑な運営】</p> <p>○情報メディアセンターと情報システム室を改組して本センターを立ち上げる。この両者の業務を引き継ぐとともに SNS 等を活用して大学の広報を行う DX 広報部門を立ち上げる。</p> <p>○システム維持管理部門、DX 推進部門、DX 広報部門の3部門を設け、互いに連絡を密にして円滑にセンターを運営する。</p> <p>○本年度の主要な目標は次の通りである。 システム維持管理部門 新しいディプロマ・サブリメントシステムの構築</p> <p>DX 推進部門 大学のネットワークシステムを点検し、佐賀キャンパスに新学部が開設することも踏まえて改善案を作成する。</p> <p>DX 広報部門 ネットを活用した大学広報の1年間のスケジュールを作成し、その運用を進める。</p>	<p>【引継ぎと円滑な運営】</p> <p>○ DX 推進センターは、情報メディアセンターと情報システム室の業務を引き継ぎ、DX 広報部門を立ち上げた。</p> <p>○ 3部門を設け、3部門の連絡を密にするため、部門長を置き、Teams チームの運用と2ヵ月毎に運営委員会を開催した。</p> <p>○ 本年度の主要な目標 システム維持管理部門 ディプロマ・サブリメント（ルーブリック）システムを導入し、教務課の協力を受け、計画より遅くなったが、2026年2月より運用を開始した。</p> <p>DX 推進部門 本学のネットワーク等を点検し、下記の改善案を作成し運営委員会で報告した。 ・統合認証システムの導入案 ・学内無線 LAN の運用改善案 ・新学部に関連したネットワーク構築案（新学部設置準備室でも検討）</p> <p>DX 広報部門 DX 広報部門で Web、SNS などを活用した大学広報の年間スケジュールを作成し、計画に従って広報活動を行った。</p>	<p>100</p> <p>100</p> <p>70</p>
	当該委員会 達成度集計		90/100
	達成度平均点		90/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	達成度
ダイバーシティセンター (センター長)	◎各部門の仕事内容や役割を明確化していく。 ①各部門の仕事の内容を改めて確認する。 ②従来の部門と委員会が良いのか、再度確認する。	◎各部門の仕事内容や役割を明確化していく。 ①各部門の仕事内容について、整理・共有し、明確化することができた。 ②運営委員会としては、事業規模および限られた人的リソースを踏まえ、「障がい学生支援部門」「留学生支援部門」「学生相談部門」の3部門に参画する形に再構築した。一方、「マイノリティ支援部門」「学生ピアサポーター部門」「男女共同参画部門」については、センター室が主体となって啓発活動および取りまとめを行い、必要に応じて関連教員から提案を受ける運用へと見直しを図った。	10
	◎障がい学生への支援の流れを確立させる。 ①新年度になり、新しい教員体制になることもあり、障がい学生の支援の流れを確認する。 ②聴覚障がい学生への支援について、教員間で隔たりがないように周知していく。 ③さらに点検を進め、施設設備で、修繕ができるところは設備の充実をしていく。	◎障がい学生への支援の流れを確立させる。 ①合意書様式の変更に伴い、簡便化された新たな手続きフローをセンター内で確認し、運用体制を整えることができた。また、配慮内容については情報漏洩リスクを低減するため、従来の紙媒体冊子での配布から、学内LANを活用したデータ管理へ移行した。 ②聴覚障がい学生が在籍する3学科とダイバーシティセンター室の間で適宜情報共有を行い、必要な支援を継続的かつ適切に提供することができた。 ③予算等の制約により、ハード面での充実化への着手が困難であり、今年度中に実施することができなかった。	9
	◎学生支援方法の新たな制度を作り、学生生活を支援する ①ピアサポーターが実際に活動できるように支援していく。 ②オンライン相談の体制・ルールを整備し、学生に周知していく。	◎学生支援方法の新たな制度を作り、学生生活を支援する ①昨年度に引き続き、全学的なピアサポーター意向調査を実施することができた。その結果を踏まえ、新たに来日する留学生の受入時に、学内外手続きの支援を行う「留学生ピアサポーター」制度を立ち上げ、3月に実施した。なお、日本人学生を対象としたピアサポーター制度については、次年度も検討を継続していく。 ②学生相談室を主体にオンライン等の相談の機会について、周知した。	9
	◎留学生への支援に取り組む。 ①令和7年度はさらに留学生が増える見込みなので、留学生の日本語能力に関する学修状況を引き続き把握していき、ダイバーシティセンターとしてもより具体的な支援を検討していく。 ②今年度の実績を基に学生支援課、国際交流センターと連携し、住まい、アルバイト、就職支援等の各種サポートをダイバーシティセンターの立場として引き続き実施する。	◎留学生への支援に取り組む。 ①全留学生を対象に、日本語能力およびアルバイト状況等に関する詳細な調査を初めて実施し、留学生全体の状況を体系的に把握することができた。次年度も同様の調査を継続し、その結果を踏まえた支援策の検討につなげていく。 ②留学生の急増に伴う住居不足への対応として、留学生向け住居支援事業のパートナーである(株)智久と連携し、短大部の留学生は初年度に本学管理の3カ所の寮(あすなる寮、リブ・グローバル249、新栄マンション)に原則入居し、翌年の進学時	10

		<p>に(株)智久関連の物件へ優先的に移行する仕組みを構築した。この取り組みにより、留学生の住まいを循環的に確保する体制を整えることができた。また、留学生就職支援事業で提携するアールアドバンス株式会社と連携し、年度当初の4月に卒業年度の留学生を対象とした、同社・ダイバーシティセンター・学生による三者面談を事業の柱として実施した。その後も継続的なフォローアップを行った結果、短大部留学生12名が内定(うち8名が内定承諾)を得る成果につながった。</p>	
		当該委員会 達成度集計	38/40
		達成度平均点	95/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、()内は責任者 ◎印は優先事項 達成度はx/10

区分及び担当	令和7年度検討 および実施事項	令和7年度総括	達成度
SD委員会 (委員長)	<p>◎SD(Staff Development)をはじめとする大学運営に関わる職員の資質・能力向上、学園内の再編改革、新学部申請に伴う取組を研修会で教職員に周知する。また、産学官連携推進研修会を引き続き実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SD研修を年4回以上実施する。 ・QSP主催の研修に参画する。 ・事務の合理化及び大学間連携に焦点をあわせた計画とする。 	<p>令和7年度に開催されたSDは、次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○7月17日 裁量労働制と基幹教員制度について ○9月2日 ハラスメントの防止について ○9月10日 永原学園経営・財務等について ○1月29日 ダイバーシティ・センターの現状について <p>また、QSPのSDにも参加した。</p> <p>このように、当初に掲げた4回のSDを開催することができた。また、財務等のSDも行うことができ、学園の運営についての資質向上に寄与することができたと考えている。ただ、事務の合理化については、事務職員の1階フロアへの統合はできたが、事務組織の合理化までは言及することができなかった。</p>	9/
		当該委員会 達成度集計	90/100
		達成度平均点	90/100

西九州大学 令和7年度アクションプログラムの総括

担当は関係委員会等、() 内は責任者 ◎印は優先事項 達成度は x/10

区分及び担当	令和7年度検討および実施事項	令和7年度総括	達成度
事務局 総務課 (課長)	基準2. 学生 《学生の受入れ、学生の支援、学修環境、学生の意見等への対応》 【2-5 学修環境の整備】 ①校地、校舎等の学修環境の整備と適切な運営・管理 (継続) ・教育目的の達成のために、環境推進委員会等で審議を重ね、より機能的で効果的な教育ができるよう検討及び整備する。 ③バリアフリーをはじめとする施設・設備の利便性 (継続) ・日常のキャンパスライフにおいて、施設・設備による支障が生じないよう引き続き改善を行う。	神埼キャンパスでは年度初め早々に大雨や落雷による分電盤等の破損や雨漏りなどの修理など学生の修学に直結する不具合整備を迅速に対応した。	7
	【2-6 学生の意見・要望への対応】 ③学修環境に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用 (継続) ・学生支援委員会等と協力し、学生からの意見を汲み上げる仕組みを適切に整備する。 ・学生からの意見を、施設・設備及び学修環境の改善につなげる。	令和8年3月3日(火)に、理事長、学長、副学長、教務部長、学生支援部長、事務局長、学生支援課長等と、各学科から2~3名の卒業予定者との懇談会を開催した。その中で学生の意見・要望について情報を共有し、次の改善につなげていく。駐車場の区画整備はその一環でおこなわれました。	7
	基準4. 教員・職員 《教学マネジメント、教員・職員配置、研修、研究支援》 【4-1 教学マネジメントの機能性】 ③職員の配置と役割の明確化などによる教学マネジメントの機能性 (継続) ・企画委員会と協力し、教学マネジメントの遂行に必要な職員を適切に配置し、役割を明確にする。	教育関連事項については、関連委員会→全学教授会→学部長会議で規定に沿った審議にて意思決定がおこなわれた。企画委員会では未来の教育に向けた議論がなされた。	9
	【4-4 研究支援】 ③研究活動への資源の配分 (継続) ・研究活動の為の外部資金導入について、事務的な支援を行う。	7/3FD で学術振興会松本氏に科学研究費助成事業について講演をいただき、大学・短大で?名の教員が視聴した。科研費添削支援を業者と契約し、18名が利用した。外部資金の公募関連情報を提供した。	8
	基準5. 経営・管理と財務 《経営の規律、理事会、管理運営、財務基盤と収支、会計》 【5-4 会計】 ①会計処理の適正な実施 (継続) ・学校法人会計基準及び「学校法人永原学園経理規程」等に則り継続的にを行い、適正な実施に努める。	学校法人会計基準及び「学校法人永原学園経理規程」等に則り継続的にを行い、適正な実施に努めた。年度末に集中していた支出に対しては事前アナウンスにより教職員の意識改善を図り、前倒しでの効率的な運営が実施できた。	8
②会計監査の体制整備と厳正な実施 (継続) ・監査法人による外部監査、監事による監査及び内部監査を通じて、研究費等の不正使用防止や業務の適正かつ効率的な運営を図る。	監事・会計監査人・内部監査部門と連携し公的研究費のモニタリングの有りかたについて提案などをいただき、業務の適正な運営を図った。	7	
③会計業務の改善 (新規) ・3キャンパスの会計業務について、現在の業務を精査し効率化を図る。	証明書発行の電子化の導入によりDX化を推進させた。また、予算執行の適正化を図り、決算予測を経営層にフィードバックする事で予算の有効活用ができた。	8	

<p>事務局 教務課 (課長)</p>	<p>《学生の受入れ、学生の支援、学修環境、学生の意見等への対応》 【2-5 学修環境の整備】 ①校地、校舎等の学修環境の整備と適切な運営・管理（継続） ・各キャンパスにおける校地及び校舎の整備に伴う教室等の適切な運営・保守管理</p>	<p>履修者の多い共通教育科目のクラス上限数を減らし教育の質担保に努め、経年劣化により不具合のあった神埼キャンパス各講義室のプロジェクターを更新し、学修環境を整備した。</p>	<p>8</p>
<p>事務局 学生支援課 (課長)</p>	<p>基準2. 学生 《学生の受入れ、学生の支援、学修環境、学生の意見等への対応》 【2-6 学生の意見・要望への対応】 ②心身に関する健康相談、修学支援新制度における経済的支援など学生生活に関して、学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用 ・健康相談の指導体制充実（UPI テスト実施及び事後指導）については、留学生支援について相談していく。 ・JASSO 給付奨学金では、支援対象が多子世帯へ拡充されたことを周知し、経済的支援の必要な学生へ支援をしていく。 ・学生生活実態調査の実施と課題の抽出、解決に向けて検討していく。</p>	<p>・令和7年度は前・後期 web で実施、前期回答率90%、後期回答率78%となり、多くの学生の健康状態を学生相談室で確認し、心身面での支援をおこなった。 ・JASSO 奨学金の多子世帯支援拡充の周知を行い、支援希望者が大幅に増加したが、学内奨学金と共に滞りなく必要な学生への支援を行った。 ・教務課との協力により、大学 IR コンソーシアム調査に学生支援課独自の内容を追加して調査を行った。学生支援関連の調査結果を教授会等で共有し、学科内で課題解決に役立ててもらった。</p>	<p>9 9 9</p>
		<p>当該委員会 達成度集計</p>	<p>97/120</p>
		<p>達成度平均点</p>	<p>81/100</p>

総合評価

各セクションの評価は以下のとおりである。

委員会等名	達成度 (%)
F D委員会	90
大学院F D委員会	80
大学院研究科	86
健康栄養学科	97
社会福祉学科	86
スポーツ健康福祉学科	88
リハビリテーション学科	84
子ども学科	98
心理カウンセリング学科	99
看護学科	86
デジタル社会共創学環	80
教務委員会	90
共通教育運営委員会	100
教職課程委員会	100
学生支援委員会	86
入試広報委員会	67
図書館	82
リカレント教育・研究推進本部	93
国際交流センター	93
D X推進センター	90
ダイバーシティセンター	95
S D委員会	90
事務局	81
平均	89

各セクションを平均した達成度は89%であった。本学自己点検・評価運営委員会は、令和7年度の自己評価を「順調に進んでいる」とする。

なお、令和7年度は達成度が70%未満にとどまった委員会等があるため、次年度においても引き続き改善を行うことを勧告する。